

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

和仏法律学校講義録

中村, 進午 / 秋山, 雅之介 / 中山, 成太郎 / 竹井, 耕一郎
/ 塚田, 達二郎

(出版者 / Publisher)

和仏法律學校

(巻 / Volume)

1-16

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

47

(発行年 / Year)

1902-06-20

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4

(明治三十四年十一月四日第三種郵便物認可 每月二回)
神 五年六月二十日發行)

三十五年度 第一學年



和佛法律學校講義錄

號 六 拾 第

和佛法律學校發行

第一學年第十六號目次

憲

法(自一九四)

法學士 竹井耕一郎

民法總則(自第一章至第三章(自一〇九))

法學士 塚田達二郎

民法物權(自第六章(自一七九)至一九八)

法學士 中山成太郎

國際公法(平時)(自一七五)至一九八)

法學博士 中村進午

國際公法(中立)(自一四八)

法學士 秋山雅之介

雜報

○住職免當否ノ論斷○外交官及ヒ領事官試驗○判事檢事登用第一回試

驗○辯護士試驗○文官高等試驗臨時委員○學年試驗

(正誤)

前號中山學士民官試驗(一六九頁八行第四章ハ第第六章ノ誤又)

一七九頁以下ニ印刷漏アリタルヲ以テ本號ニ於テ訂正セリ又

新

090
1902
1-1-16

何ヲ代表スヘキヤ蓋シ箇箇別三國民ヲ代表スルコトハ到底爲シ得ヘカラツ
ルコトニ屬ス左リストノ國民全體トシテモ權利利益ヲ有セストセハ畢竟代表ス
セキモノ大キニ歸著スヘシト論ズ右レソニノ説ニ對スル第一ノ反對ハ予ノ贊
セナル所ナリ何トナレハ予ハ外國ノ制度ニ於クハ國民ハ主権者ナリ即チ國民
ハ法人トシテ權利利益ヲ有スト者フルカ故ニ議會カ之ヲ代表スト云フハ必ス
シモ不可ナラストスレハナリ但國民ヲ主権者ト看做ナシシテ而モ之ヲ法人ナ
リトハ云ヒ得ヘキモ之ヲ以テ唯一ノ方法ナリト謂フヘカラス例ヘハ貴族院議
員ノ如ク他ノ方法ニ依リテ議員ト爲ルモ若シ其職カ國民ノ權利利益ヲ代表ス
ベニ在レハ之ヲ代表者ト稱スルハ毫モ不可ナシト此點ハ實ニ然リ若シレソニ
ノ言フカ如クシハ唯選舉セラシ議員ノヨリ其代表者カリ當フハ換フヒ議會全
體トシテハ未タ國民代表ノ機關ト稱スルコト能ハナルコトト爲ルヘシ

以上、「レンチ」ノ説ニ對スバ反對論者ノ主張ノ要點ナリセント也。予カ大體ニ於テ「レンチ」ニ反對スルノ點ハ國民主權ノ國ニ在リテハ統治ノ機關ハ皆國民ノ機關ナリ故ニ當ニ議會ノミカラズ其他ノ機關モ皆國民ノ權利利弊ヲ代表スルモノナリ也云ヒ得ハシ果シテ然ラハ特ニ議會ノ議員ノヨリ代表者トシテ論斯ルハ理論未タ正確ナラスト云フニ在リトスベキ大體ハ、
次ニ「シルツエ」反ヒ「オルシテリ」等ハ「ビンチ」ト異ナリ國民ヲ以テ直ナニ法人ト爲ナス而モ法學上無意味ノモノトモ看サル一種ノ特色又有スル學說ニ屬ス先づ「シルツエ」ハ曰ク國民ハ法人ニ非ス故ニ議會ハ之ヲ代表スト謂フコト能ハス然レトモ國民ハ亦單純ナル機械の人集合トモ異ナリ一種ノ目的ヲ有シ一種大通性ヲ有スル有機的團體シテ事實上議會ハ其團體ノ意思ヲ發表スルカ爲ヌ設ケラバタクモノカルコト復交争フカラス畢竟法學上議會ハ法人代表ノ機關トハ云ヒ得サルモ議會ノ意思ハ國民ノ意思ナリト謂フコトヲ得ヘシト蓋シ氏ノ議論ハ甚タ婉曲力足ト雖モマ方ニ於テ國民ノ法人ト看做ガサリニ拘ハラス一方ニ於テ國民ノ意思ヲ認ムハ觀念ノ擅著ナリトノ批難ヲ免レ難シ

何トナシハ法學上國民ノ意思ナルモノハアレハ其意思ノ主體外ル國民ハ即テ法人下謂ハサルヘカラザレハナリ國民ノ意思ナリ也大
次ニ「ブルンチリ」モ亦國民ノ機體説列主張ジテ曰ク國民ト議會トノ關係ハ譬へバ土地ト地圖トノ關係ノ如シ地圖ハ土地ノ形狀ヲ其體縮寫シタルモノハアル如ク議會ハ國民ノ狀態ヲ其體縮寫セル機關ナリト此觀念ノ確立テルハ後ニ達フル所ニ據リテ明カナリニ由キ國民ノ中ニ於テ君主及上其官吏ニ對シテ一般臣民ヲ代表スル機關ナリト爲ス蓋シ民ハ他ノ學者ノ如ク無形ノ國家ヲ以テ主權者トセス唯リ君主ヲ以テ主權者ナリトスルヨリ此ノ如キ論結ヲ惹起シタルナリ然レトモ此觀念ハ益々不可ナリ既ニ述ヘタル如ク國民全體トシテハ法人トシテ權利利益ヲ有シ得ヘケルトモ君主及上其官吏ヲ除キ其他ノ臣民不集合ヲ以テ權利利益ヲ主體トシテ觀察スルト固運リ不可ナリ然ラハ議會ハ黑

シテ何ヲ代表スキカ蓋シ簡節別別ニ臣民ヲ代表スルコト能ハサル事トハ既ニ述ヘタル如シ左リトア臣民ノ集合トシテハ代表セラルニキ權利利益ヲ有セサルナリ。然ニテ此種公私混合本流ヤミ通ヨリ起る事ハ成ニ因員全體イリ也。斯くて以上ノ學說ハ要スルニ社會學政治學上ノ觀察トシテハ或ヘ可ナムケニトモ。法學上ノ觀察トシテハ皆不完全ナリ是ニ於テカ最近二三ノ學者が議會ハ特ニ國民若クハ臣民ヲ代表スルカ爲メニ設クラレタルニ非ス國家ノ立法及ヒ歲出入等ニ協賛スルカ爲メニ設クラレタル機關ナリト論スルニ至レリ。蓋シハ

(第四) 我國法トシテモ議會ハ天皇ニ對スル協賛機關シテ人民ノ代表機關ニ非ス議會議員ノ一部ハ人民ニ由リ選舉セラルルト雖モ選舉ハ人民カ其代表者ヲ選出スルニ非ス選舉人トシテ國家機關ノ組織ニ參與スル公職務ナリ此ノ如クシテ選舉セラルル議員ハ選舉人トノ間ニ何等ノ連絡又有キス隨テ選舉人ハ爲メニ何等ノ拘束ヲ受クルヲ要セス唯國家機關ノ組織スル一員トシテ專心ニ其職務ニ就キ國家ノ利益幸福ヲ圖ルノ外アルヘカラサルナリ。

我國法上議會ノ地位ヲ論スル者或ハ議會ハ天皇ト其ニ國家直接ノ機關タリト

稱シ或ハ天皇ニ對スル節制機關ナリト曰フ前説ニ關シテハ既ニ其不可ナムコトヲ論シタルカ故ニ之ヲ略シ唯後説ニ付テ「言セシム者天皇根柢無體也」云々天皇ニ對スル節制機關トハ何ニ即チ天皇ノ行爲ヲ制限スル機關ナリト云フノ意ナリトス此觀念ハ全ダ歐洲諸國ノ主義ニ基キ天皇ハ議會カ立法ニ參與スルト同シク裁判所ハ家ノ機關ニシテ一方ヲ以テ一方ノ行爲ヲ制限スト云フノ觀念ナリ此觀念ヲ推ストキハ當ニ議會ノミナラス其他ノ憲法上ノ機關モ亦天皇ノ行爲ヲ節制スルモノナリトス此觀念ハヨコトヲ得ヘシ例ヘハ議會カ立法ニ參與スルト同シク裁判所ハ司法権ノ行使ヲ掌テ以テ天皇ヲ節制スト云々得ヘキナ更語ニ類似モ要ニ此ニ

此種ノ觀念ハ外國ノ主義トシテハ或ヘ可ラランモ我國法ト背為テ絶對ニ不可ナリ議會ハ天皇ニ由リ權限ヲ付與セラレタル一機關ナリ天皇主相對シテ之ヲ節制スル機關ニ非ナルコト蓋シ言ヌ矣タナムカ又ニ二説拂く殊甚イシモ顧大義無犯也

第二節 帝國議會ノ組織

ヲハ必スシモ両院制ニ限ラズ例ヘニ獨逸帝國之如キハ一院制タリ是レ蓋シ獨逸國ニ於ケル特種ノ事情ヨリホルモノトス其他ノ數國ニ於テ一院制ヲ採用スト難モ多クノ國ハ両院制度ヲ採ル

二院制ノ可否得失ハ一概ニ之ヲ論斷シ難シ今一般ニ二院制ノ利益トシヲ認メラル點ヲ舉クレ云(一)凡ノ事物ハ唯一面ノ觀察ヲ爲スヨリモ其両端ヲ調和スルノ正確ナルニ始カチニヤ明カナリ故ニ同一ノ議案ニ就キ両院別別ニ之ヲ研究スルハ甚ダ必要ナリ(二)立法ノ作用ハ普通行政ヲ如ク教活ノ處置ヲ要スルニ非ス寧ロ丁寧審議以テ長久ノ計ヲ爲スベキモノナリ然ルニ一院ノミニテハ間、多數ノ勢ニ驅ラレテ經卒ノ決議ヲ爲ズ恐アリ故ニ両院制ヲ可トス(三)院制ヲ採ルトキハ政府ハ議會ト衝突シ易ク其結果屢々累フ天皇ニマチ及ボズノ恐ナキニ非ス然ルニ二院制ヲ採ルトキハ両院互ニ牽制シ政府ト議會トノ衝突モ自ラ少ク政府ノ瓦解議會ノ解散モ多少避クルコトヲ得ヘシ四何レノ國何レノ時代ニ於テモ國民ノ中ニ於テ財產門閥學藝等ニ因リ自ラ社會ノ上層ヲ組織スル者アリ此等ハ其社會ニ取リテ甚ダ重要ナル者タルニ拘ハラス數ニ於テハ遠ク下

層ノ者ニ及ボス故ニ若シ二院制ヲ採ルトキハ此等ノ者ハ屢々多數ノ爲メニ屢セラレ意思發表ノ機會ヲ得タルノ恐ナキニ非ス故ニ別ニ一院ヲ設クルノ必要アリト論スモ(二)議會之權力ニ就カニ言ハシム議會ハ國會イ又ハ議會ハ議會右ニ述バタル所ハ一概ニ參同シ難キ點ナキモ非サレモ之ヲ論スル事ハ主トシテ立法論ニ亘ルヘキカ故ニ姑ク之ヲ略ス而當暫ハ事務を委託セシム事也必要ハス(三)二院制ニ於テハ議會ノ職權ハ両院合同シテ行フノ原則トス故ニ議案ノ成立スルニハ兩院ノ議カ一致スルヲ必要トス但議案ヲ成立セシメテハ所カ爲メニハ一院ノミニテ足レリトスハスも要アリテハ事務を委託セシム事也必要ハス(四)次ニ二院制ニ於テハ議會ノ開會閉會停會ハ總ニ二院共ニ行ハサルヘカラス但解散ノミハ衆議院ニ對シテ行ハシ貴族院ハ同時ニ停會ヲ命セラルルコトトス

右ノ如ク原則ハ兩院合同ニ在レトモ議會内部ニ於テハ各院ハ各別ニ獨立ノ合議體ヲ成ル独立シテ議會ヲ行スルノ不爾院カ一所ニ會合スルハ唯儀式的ノ場合ニシテ例ヘニ開會及セ閉會ノ式ヲ行フトキノ如シ論セシム事也

尙ホ議會ニ議ニ付スベキ事件ニ關シテハ兩院對等之地位ニ立フヲ通例トスレ
奉毛唯算算ハ例外トシテ先フ衆議院ニ呈出スヘキモノトスルニ通論矣
合々此ニ照見テ國會合議ニ付スル事當ニ於テハ各議院ヘ各限ニ獨立ニ合
ル。

第三節 帝國議會ノ種類

憲法第四十一條乃至第四十三條ニ依レハ先フ一般規定トシテ議會ハ毎年之ヲ
召集シ三箇月ヲ以テ會期トス但必要ノ場合ニハ勅命ニ由リ延長スルコトアル
ベシト定ム次ニ臨時緊急ノ必要アルトキハ常會ノ外臨時會ヲ召集ス而シテ其
會期ハ勅命ニ由リ定ムヘキモ久長ス之ニ依レハ先フ議會ニ常會及ヒ臨時會ノ
二種アリ而シテ其區別ノ要點ハ(一)通常會ハ普通三箇月ヲ會期トス然ルニ臨時
會ノ會期ハ全タ勅命ニ由リテ定ムルヨリ(二)通常會ハ臨時緊急ノ必要ナクトモ
毎年召集セサルヘカラス然ルニ臨時會ハ臨時緊急ノ場合ニミニ之ヲ召集スル
コト是ナリ尙ホ議事規則ニ依レハ臨時會ノ場合ハ通常會ト異ナリ前會ノ議席
及ヒ部屬ヲ繼續スルノ差アリトスル也

茲ニ問題ト爲ルハ憲法第四十五條ナリ同條ニ依レハ衆議院解散ヲ命セラレタ
事項也

シテキテ五箇月以内ニ更ニ議會ヲ召集スヘキモノトセリ而シテ本條ニ依リテ
開夕所ノ議會ハ通常會ナリヤ又臨時會ナリヤ將來又憲法上一種特別ノ議會ト
認ムルヲ得テキヤニ在リ特會ニ非ヌニ種類也又臨時會ノ議會ハ每年召集セラルモノト異ナル
是故特別會說ニ依レハ解散後ノ議會ハ毎年召集セラルモノト異ナル
故ニ通常會ト謂フヘカラス又臨時緊急ノ必要アリテ開カルモノトモニトモ異ナル
故ニ臨時會トモ云ヒ雖該畢竟一種特別ノ議會ト看做シ其會期モ勅命ニ由リ定
マルモノトスベシト論ス會イ蓋シテ

此說ニ對スル批難ノ點ヲ舉タレハ(一)通常會ト臨時會トハ憲法上明カニ規定無
ラルレドモ所謂特別會ナリモナラ認メタル形跡ナシ(二)此說ハ解散後ノ議會主
臨時緊急ノ場合ニ非ス上爲スト雖モ一方ヨリ論スビハ解散ト云フ臨時ノ事件
ノ爲メニ急ニ五箇月以内ニ召集スヘキモノナリカ故ニ即チ臨時緊急ノ必要ニ
因リ開カルモノト云ヒ得ヘシ(三)論者ハ此議會ノ會期ハ勅命ニ由リ定マルト
云フト雖モ第四十五條ニハ會期ニ關シ何等ノ規定ナシ左述トテ臨時會ニ關ス
ル會期ノ規定ハ特例ニ屬スルカ故ニ漫然之ヲ他ノ議會即チ論者ノ所謂特別會

ニ適用スカラナルヤ明カナラ巴ム得スシ以一般規定ニ依リ三箇月ヲ以ア
會期トセナルヘカラナルコトト爲ルヘキ方免ニ角論者ノ如ク勅命ニ由リ解散
後議會ノ會期ヲ定ムヘシト云フハ論據ナキノ說ト謂フヘシ命ニ由リ宗マニ
以上特別會說ノ缺點ヲ指摘セリ之ヲ要スルニ憲法ハ通常會ト臨時會トメヲ
掲ケ特別會ナルモノ規定セス且解散後ノ議會ニ付テハ特ニ會期ヲ規定ヲ設
ケス此二點ヨリ推スモ解散後ノ議會ハ通常會若クハ臨時會メ一種ト看做ビ其
規定ニ依ラシムルノ趣意ナルコトヲ測定シ得ヘシト考フ果シテ然ラハ之ヲ通
常會トスヘキカ將ク臨時會ト爲スヘキカ

二、通常會說ニ依レバ二點ヨリ立論ス(一)解散後ノ議會ハ臨時會ニ
非ス蓋シ之ヲ臨時會ナリトスルニテ臨時緊急ノ必要ヲ認メナルヘカラス臨時
緊急トハ憲法ノ豫想セガル場合ヲ謂フ然ルニ解散後ノ議會ハ憲法第四十五條
ニ於テ之ヲ豫想ス故ニ臨時會ニ非ス(二)解散後ノ議會ハ通常會ノ性質ヲ具フ蓋
シ通常會トハ憲法上ノ必要ニ因リ一定ノ時期ニ開會スルモナルカ故ニ此性質ヲ具
議會モ憲法上ノ必要ニ因リ五箇月以内ニ開會スルモノナルカ故ニ此性質ヲ具

有スト云セ得ヘシト論ス
右第一ノ點ニ於テ憲法ノ豫想セガル場合ト云フハ如何ナル意義ナリヤ明カナ
ラス若シ臨時會ヲ以テ豫想外ノ場合トシ解散後ノ議會キ亦豫想外ト云ヒ得
ヘシ何トナレハ解散ハ何レノ時ニ起ルカ全ク豫想シ難キコト恰モ臨時緊急事件
カ何レノ日ニ起ルカ測ルヘカラサセト同シクレハナリ若シ又解散後ノ議會ヲ
憲法カ豫想スト云ハシカ臨時會モ亦憲法カ豫メ想シノ規定シタリト謂フコ
トヲ得ヘシ畢竟豫想ノ意義ヲ如何ニ定ムルモ解散後ノ議會ト臨時會トヲ區別
スル明白ナル標準ト爲スヘカラス次ニ第二ノ點ニ於テ解散後ノ議會ハ憲法上
ノ必要ニ因リ一定ノ時期ニ開クカ故ニ通常會ナリト云フト雖モ(一)憲法上ノ必
要トハ通常會ニノミ謂フベキニ非ス臨時會モ亦此必要ニ因リ開會スルモノナ
リ(二)解散後ノ議會ニ付テハ唯解散ヨリ五箇月以内ト定メタルノミニシテ解散
其レ自身カ何レノ時ニ起ルカ測ルヘカラサセトカ故ニ之ヲ以テ一定ノ時期ニ開
會スルモノナリト謂フヘカラス言ヲ換フレハ通常會ノ如ク毎年開會ト定マレ
ルモノニ非ス故ニ此點ヲ以テ通常會ト同一ナリト論スルハ大早計ナル論法ト

謂ハサルヲ得スニ由謂可也又議會ノ開催日も議會之日より遅くハ大半當日より前日也ナリ何トナレハ(一)解散後ノ議會ハ臨時會ト同シク解散後五箇月以内ニ召集スヘキ臨時緊急ノ必要アリ(二)解散後ノ議會ニ付テ第四十五條ニ會期ヲ規定セラルハ第四十三條ノ一場合ト看做シ第四十三條ノ規定ヲ適用セシムル精神ナリト論スニ關シ一致シ機體ヲ擱シニ成ニ通常會大モソニモ此等之議會ニ過甚土く心此說ハ是マテ述ヘ來レルモノニ中ニ於テ缺點最モ尠シ然レトモ雖此說ニ依シハ一年内ニ必要ナクシテ屢議會ヲ召集セラルヘカラサル場合ニ生ヌ例ヘハ前年ヨリ引續キタル議會ヲ解散シ五箇月以内ニ臨時會ヲ召集シ更ニ又第四十一條ニ依リ其年内ニ少クトモ一度ハ通常會ヲ開カサルヘカラサルコト爲リ徒ニ煩雜ヲ極メ實際上甚タ不都合ナルヲ免レサル場合アルヘシトノ批難アリト四解散後ノ議會ハ通常會若クハ臨時會ナリトスル說此說ニモ數種アリ例ヘハ「ボルンハウ」等ノ如ク費算フ諸スルトキハ通常會ニシテ然ラサレハ臨時會ナリトスル說アリト雖モ我憲法ニ於テハ必スシモ此區別ヲ認メサルカ故ニ省

略シ唯我國學者ノ中ニ於テ有力ナル一說ヲ掲ケン曰ク解散後五箇月内ニ通常會ヲ開クヘキ定期カ到著スルトキハ通常會トシテ開會スヘシ之ニ反シテ五箇月内ニ此定期カ到著セサレハ通常會ヲ待フ能ハサルカ故ニ臨時會正テノ開會セサルヘカラス畢竟一方ニ偏シテ論スルヲ得スニ至天皇ノ御詔ニ對本ノ御意此說ハ甚タ巧妙ナリ然レトモ先ツ其缺點ヲ舉クレハ(一)論者ハ通常會ヲ開クヘキ定期ト云フト雖モ憲法ハ唯毎年召集ヲ定メタルノヨリ何月又ハ何日は開會スト定メサルカ故ニ憲法上定期ト稱スヘキモノナシ左レハ之ニ據リテ通常會タル臨時會タルトノ區別ヲ爲スコト能ハス(二)假令實行ニ依リ定期アリトシテ論スルモ定期到着ノ時ヲ以テ區別スルトキハ例ヘハ其時ヨリ僅ニ前丈ヒ未臨時會ニシテ其時來レハ最早通常會タリト云フノノ奇ナリ論結ト爲ルヘシ(三)前述ノ通常會說及ヒ臨時會說ニ對スガ批難ハ此說ニモ應用セラルモノアリ開會右ハ第四說ノ缺點ナリ之ニ反シテ此說ノ長所ハ以上ノ諸說ノ如ク先ツ別ニ解散後ノ議會ヲ想像シ此議會ハ通常會ノ性質アリテ又臨時會ノ性質アリカノ論スルノ論法ニ依ラズ唯解散後ニ通常會ヲ開クヘキカ臨時會ヲ開クヘキカノ問

題ト爲セルノ點ニ在シテス故ニ臨常會を開キテ其の議會を開く事無く開ク此點ハ予モ賛成スル所タガ然威宣モ此說又缺點即夫定期ノ到着又以テ議論力分フハ前述ノ如ク賛成スルコト能ハス、是れヘ是以テ議論力果竟憲法ハ解散後五箇月以内ニ議會ヲ召集ストノミ規定シ通常會トシテ開クカ臨時會トシテ開クカハ國家ノ意思ニ一任シタリト云ヒ得ヘシト考フ何トナレハ先フ通常會トシテ開クコト以勿論差支ナシ次ニ臨時會トシテ開クモ亦差支ナシ何トナレハ此場合ニハ臨時緊急ノ必要アリトモ云ヒ得ルヨトハ前ニ述ヘタル如クナレハナリ土五便ノ解スヘシトヤハ太田ノ文書解説ヘ臨常會以上議會ノ種類ヲ説明セリ終ニ問題未ハシテ臨時會及會期ヲ定メタル場合ニ必要ニ因リ更ニ勅命ヲ以テ其會期ヲ短縮シ又ハ延長スルコトヲ得ヘキヤ否ヤニ在リ蓋シ臨時會ノ會期ヲ定ムハ總テ天皇ノ認定ニ任スノ趣意ナルカ故ニ之ヨリ推シテ一旦定タル會期正難モ必要アレバ之ヲ延長シ若クハ短縮シ得ト論シテ差支ナシト考フ議會開會ノ事ニ及シテ正當議會外國會中ニ於ケル事也ハ一例也豈ヤハ日也戰勝者正當民内ニ臨常會

第四節 帝國議會ノ開始停止及ヒ終了

第一款 帝國議會ノ開始
帝國議會ノ開始トハ國法上議會トシテ成立スルヲ謂フ蓋シ議會ノ成立ハ天皇大權ノ作用トシテ開會ヲ命セラルニ由ル議院法ニ依レバ天皇ハ先オ議會ヲ召集ス嚴格ニ解スレハ此場合ハ議會ヲ召集スルニ非ス議會ノ議員ヲ召集スルナリ故ニ召集アリトモ議會ハ未タ成立シタルニ非ス次ニ議員ハ召集シリヲ議會シ議長副議長及ヒ各部局構成シ此ニ各議院ノ成立ヲ見ル但議會開シテハ尙ホ未タ成立セス終ニ勅命ニ由リ開會ヲ命セラルニ至リ始メテ議會トシテ成立スルモノトス尤モ實際議事ヲ始ムルト否トハ成立ニ關係ナキモアレス』先づ問題ト爲ルベキハ議會召集人後何日ニ開會スヘキヤ否ヤノ點ナル之ニ關シテハ種種ノ説アリテ甚多く之を主張する者有リハ且意ナリ(甲)憲法ニ於テ議會ハ毎年召集スヘシト認定スレドモ開會ニ關シテハ別ニ規定ナシ唯天皇ハ開會ヲ命スル事タルノミ故ニ開會ハ全ク天皇任意ノ作用無

屬スト看ナルヘカラスド論ヌ然レトモ此說が憲法ノ精神ニ適合セサルナリ何トナレバ(一)憲法云天皇開會ヲ命ストアルニ必ス開會ヲ命セラルヘキコトヲ宣言シタルモニシテ議會ヲ召集シタルニ拘ハラス之ヲ開クト否トハ任意ナリト云フヨリ趣意ニ非ス(二)若シ召集シタル後開會セヌトモ可ナリトシソガ次年ニ至リ更ニ召集スルハ何等ノ意味ナキオトドケルヘシ是に憲法カ毎年召集スベシ開定メタル趣意ト符合セヌ由リ開會マ命ナシハ勿論也惟支那事變時憲法會不

(乙)開會ノ時期ニ關シテハ何等ノ制限ナキ故ニ次年左議會召集前ニ開會スルヲ得ルノ期間ヲ見積リテ開會スルハ毫モ支障ナルトナシト論ヌ此說ニ依レハ今年議會ヲ召集シタルニ拘ハラス翌年ノ終ニ開會スルモ差支ナシトス此ノ如キハ單ニ理屈ヲ弄スルノミシテ憲法ノ精神ニ合セリト謂アヘカラス

(丙)議會ヲ召集スレバ直ナニ開會スベシト論ス此論ハニ理アガニ似タリト雖モ餘リニ嚴格ニ過キ所謂約子定規ノ批難ヲ免レス蓋シ已ムヲ得サル場合ニハ召集ト開會トノ間ニ多少ノ時日ヲ置クモ憲法ノ規定ニ反スルコトナキノミナラス甚タ便宜ニ合スルモノナリ

ノ商取引ヲ爲シタルカ如其場合ニ於テ法人ハ其責ニ任スルコトナシ是レ法
人ハ其目的ノ範圍内ニ於テ権利ヲ有シ義務ヲ負フモノナルヲ以テ法人ノ代理人
人ト取引スル者ハ其取引ハ法人ノ目的ノ範圍内ノ行爲ナルヤ否ヤア審査セテ
ルヘカラス若シ其取引カ法人ノ目的ノ範圍外ナルコトヲ知リテ取引スルトキ
ハ其行為ハ法人ニ對抗スルコトヲ得サルモノナルゴトテ豫期スルモノナルカ
故ニ之ニ伴フ損害アリタリトスルモ法人ヲシテ其責ニ任セシムヘキ理由ナシ
若シ又其取引カ法人ノ目的ノ範圍外ナルコトヲ知ラヌシテ取引シタル者アリ
トセハ相手方ハ之ヲ知ラナレニ付キ過失ノ責ヲ免ルルコトヲ得ス過失アル相
手方ノ利益ヲ保護スルカ爲メ其行為ニ關係ナキ法人ヲシテ其責ニ任セシムヘ
キ理由ナキヨ以テナリ而シテ此場合ニ於ケル不法行為ノ責任ハ之ヲ爲シタル
者ニ屬スルナレ當然アリト雖モ其行為ヲ爲エトヲ職決シタル社員及ヒ理事事
リタルトキハ連帶シテ其責ニ任セサルヘカラス(第四四條第二項)商人又ハ財
法律ニハ理事ノ資格ニ關スル制限ナキヲ以テ社員タルト否トヲ問ハス理事事
シテ選任スルコトヲ得ベク其選任ニ裁判所ニ於テ執行スル場合ヲ除クノ外定

款又ハ寄附行爲ニ定メタル友法ノ依存實例ヘカラス又理事カ死亡過任等不臺由ニ因リ缺員ト爲ル法丸人業務別執行スル者才智力爲ル事務人激滯又委託損害ヲ生ヌル處置所シトナシトセス此場合ニ於テハ裁判所ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ假理事ヲ選任シ之忍シハ法人ノ事務又執行セシムルコトヲ得ヘ第亜六條以モハ而モ其當合ニ付セシム不當計錄ヘ達致ヘシモ欲セシム年式ハ除益ミ取扱ヘシハ然レバ其計算ニ關最尤タ居人モハ其實ニ付ナシムヘシテ除手書ハ第二項監事

法人ハ定款寄附行爲又ハ總會ノ決議ヲ以テ監事カル機關又設セバコトヲ得此機關ハ理事ノ業務執行ノ當否ヲ監査スルモノニシテ理事ヲ代リ法人ノ業務ヲ執行スル權限又有セキ蓋シ理事ヲ法令又ハ定款寄附行爲看護定ニ從ヒ正當ニ其業務ヲ執行スルヤ否ヤハ官廳ニ於テ之監督スト雖モ直接ニ理事ノ行動ヲ付キ周到ナル監督ヲ期スルモ得ヘカラス故に理事ノ行動ヲ對シ十分ノ監督ヲ爲ナントセハ法人ノ内部ニ於テ之ノ監督又ヘキ機關ヲ設置スル必要アリ然レトモ資產モ少ク業務モ繁劇たるサル法人ニ在リカ特別人監督機關又設ク然

ハ管ニ法人ノ經費ヲ増加スルノミニシテ其必要ナキヨリアルヘキヲ以テ法律ハ監事ヲ設クルト否トハ全之法人ノ任意ナリトセリ當然人ノ指揮ノ根柢也監事ハ一名ヲ置クヘキカ又ハ數名ヲ置クヘキカハ亦法人ノ自由ニ決定シキ事項ナリ而シテ監事ノ權限ハ限定的ニシテ法人財產及び理事ノ業務執行ノ狀況ヲ監査シ不整理不適法ノ事跡アルコトヲ發見シタルトキハ之ヲ總會又ハ主務官廳ニ報告シ之カ報告ヲ爲ス爲メ必要アルトキハ總會ヲ招集スル旨在是此權限ハ定款寄附行爲又ハ總會ノ決議ニ依リテ之ヲ制限シ又或擴張スルコトヲ許ナシスハ承認又應准允之運送セシムリテハ號牌ニ附セシムリテ總會ニ有ス
第三項 總會

社團法人ハ上述ノ機關ヲ外尙ホ總會ナル機關ヲ有ス總會ハ法令ハ範圍内ニ於テ法人ニ關スル重要ノ事項ヲ講決スル機關ニシテ法人ヲ支配スルモノナリ其決議ハ理事ノ行為ヲ拘束スルノミニラス法人ノ目的ヲ變更シ又ハ法人ヲ解散セシムルヨトヲ得ヘタ定款ヲ以テ法人ノ業務ヲ執行スル者ニ委任セル事項ヲ

除クノ外法人ノ事務ハ總ヲ總會ニ於テ議決スヘキモノタリニ鑑財主ノ事務取扱
第一ハ總會ノ招集スル事務大抵人目論で靈通シ又ハ其人ニ報請
總會ハ理事又ハ監事メ招集ニ依リテ開會セラルヘキモノニテ招集大キニ拘
ハラス自ラ開會シテ議決ヲ爲ス權限ヲ有セス理事又ハ監事皆必要而認ムタ然
トキハ何時ニテモ總會ヲ招集スルコトヲ得ヘシ加之總社員ノ五分ノ一以上ヨ
リ總會招集ノ目的タル事項及ヒ理由ヲ示シテ請求シタルトキハ理事ハ總會ヲ
招集セナルヘカラス理事カ之ヲ拒ミタルトキハ裁判ニ依リテ之ヲ理事ニ命ス
ルコトヲ得ヘシ理事カ尙ホ此命ニ從ハサトキハ判決ヲ以テ理事本意思表示
ナ同一ノ效果ヲ生セシムトコトヲ得清算人ハ清算ノ職務ヲ執行スルニ當ラ總
會ヲ招集ズルコトヲ得ヘキヤ清算人ハ運任せラシル場合ハ當ニ法人ノ解散セ
ルトキナリト雖モ法人ハ清算ノ目的ノ範圍内ニ於テ尚余存續不ル者ハナリカ
故ニ清算人カ清算事務ヲ爲スニ當リ必要ト認メタルトキハ何時ニテモ總會ヲ
招集スルコトヲ得ヘシト主張スル者アリヘシト雖モ清算人ハ法律ノ規定ニ依
リ清算事務ヲ執行スヘキモノニシテ總會之議決ニ從フ義務大キノミナラヌ其

議決ヲ執行スヘキ機關ニ非ナルヲ以テ總會ノ招集ハ清算人ノ職務ヲ行フニ必
要ナル行爲ト謂ノコトヲ得ス限テ清算人ハ總會招集ノ權限ナキモノト解釋ス
ルヲ至當トス
大抵人目論で靈通シ又ハ其人ニ報請
總會ノ招集ハ少タトモ五日前ニ決議スヘキ事項ヲ示シテ定款ニ定メタル方法
ニ從ヒテ之ヲ爲シナルヘカラス是レ各社員ヲシテ決議スヘキ事項ニ付キ熟考
ヲ爲スニ必要ナル日時ヲ與フ管人ミナラス豫メ集合スヘキ期日ノ知ニシム所
ハ出席ヲ容易ナランシムガニ缺クヘタラスアル方法ナリ
大抵人ニシム所
第二ハ總會ノ種類等ハ多岐ニ亘る事務足敷用宣總會數々開會
總會ニハ通常ト臨時トノ二種アリ通常總會ハ少冬トモ毎年一回之ヲ開ク但キ
モノニシテ理事ニ於テ之ヲ招集スヘキ義務ヲ有ス蓋シ社團法人ノ社員ヲシテ
理事ノ業務執行ヲ監督セシムルニハ少少クト者毎年一回ハ社員ヲ會合セシメ法
人ノ事業及ヒ財產ノ状況ヲ知ラシメ役員ノ勤怠功績過失ヲ知ルノ機會ヲ與フ
ル必要アルヲ以テナリ又手續ニ開會を當選議案を提出する者に就く事務取扱
臨時總會ハ時時ノ必要ニ應シ理事又ハ監事ニ依リテ招集セラル者セノニシテ

之ヲ招集スヘキ義務ヲ負フ者ナシ唯總社員ノ五分ノ一以上又ハ定款ニ規定セル定數ノ社員ヨリ適法ノ手續ニ依リテ之カ招集ヲ請求シタルトキハ理事ニ於テ招集セサルカラズ獨逸民法ニ於テハ社員ノ十分ノ一以上ヨリ總會ノ招集ヲ請求スルコトヲ得ベシトモ第六一條獨逸民法第三七條真文會合ノ一大點第三ニ議決ノ方法第ニ大字は議決及ハチノ諸選舉及ハチノ議員起人公擇選及ハチノ總會ニ於テハ定款ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外豫々通知シタル事項ニ限リテ議決スルコトヲ得ヘキノミ蓋シ通知以後ノ事項ト雖モ便宜其會議ニ引導キ議決スルコトヲ得ストゼハ時シテ不便宜不經濟ノ傾ナキニシモ非ス然レトモ若シ自由ニ之ヲ爲スコトヲ得ハシトセハ會議ノ目的ヲ示ジテ招集スベキ理由ト抵觸スルノミナラス理事ハ之ヲ利用シテ奸手段ヲ施シ不當リ議決ヲ得若クハ理事派ニ屬スル社員カ多數出席シタル半年よ其機會ヲ利用シテ重要ノ事項ヲ議決セシメ法人ノ利益ヲ害スルカ如キ處ナシトセス故ニ法律ハ便宜ト弊害トヲ比較シ原則トシラヌ豫々通知セタル事項ハ議決スルコトヲ得ストモリ

(第六四條)

社團法人ノ各社員ハ總會ニ出席シテ決議ノ數ニ加ハルコトヲ得ルモ其決議スヘキ事項カ社團法人ト或社員トノ間ニ成立シ若名ハ成立スヘキ法律行為又ハ訴訟行為キ開タルトキ例ヘハ或社員ヲ除名シ又或社員ニ贈與又爲スル如若クハ或社員ニ對シテ訴え提起スルカ如キ此等ノ場合ニ於テハ其社員ハ決議ノ數ニ加ハルコトヲ得ス是レ或事項ニ係キ利害關係又有スル者ハ自己ノ利益ヲ謀ラシカ爲メ往往偏頗カバ判斷ヲ下スル弊ナシトセサレハ本末而シオ各社員ノ有スル議決權ハ平等ナルコトヲ原則トス蓋シ株式會社ノ如キ資本ニ依リテ事業ヲ經營シ利益ヲ取得スノ目的トス所モ古ハ其利益ヲ保護スルカ爲メ出資ノ多少ニ依リ表決權ニ差等ヲ設タル必要不^ニ上雖モ公益ニ關スル社團法人ノ設立ハ直接ニ社員ノ利益ヲ目的トスルモ^ニ非ス社員各自之公益ノ増進ヲ期スル點ニ於テハ出資ノ多少ニ依リテ差違ナキヲ以テナリ取人^ニ總會ノ決議^ニ法律ニ特別の規定ナキヲ以テ出席社員ノ多數決ニ成ルヘキ也人ナリ然レヒモ定款ヲ變更^ニ法人ノ解散人決議ハ總社員ノ四分ノ三以上之同意ヲ要ス第三八條第六十九條其以外ノ事項ヲ議決スルニ當リテ出席社員ノ多數ナ

ルト否ト其過半數ノ同意ヲ得ル事否トム決議ノ效力ニ關係ナシ若シ出席者士人ナルトキハ其意思表示ヲ以テ總會ノ決議ト謂フコトヲ得ヘシ又或事情ノ爲メ總會ニ出席スルコトヲ得テル社員各自ノ意見ヲ徵シ完全力加決議ヲ爲サルラス出席セナルノ故タ以テ之ヲ表示スルヨリタ得ス若クハ代理人ヲシテ之ヲ陳述セシムルコトヲ得ストセハ社員各自ノ意見ヲ徵シ完全力加決議ヲ爲サルメントスル趣旨ヲ實微スルコトヲ得ス却テ不利不便鮮カラサル故ニ缺席者ト雖モ文書ヲ以テ又ハ代理人上依リテ表決權ヲ行フコトヲ得ヘキモノアリ也リ
(第六五條) 諸共財ノ平事大抵レモモ思期小手舊利潤會計ヘ餘カ資本未足シ若シ總社員ガ或事項ニ付キ文書ヲ以テ同意ヲ表示セハ總會ノ招集ガシト雖並其決議ハ有效ナルヤ否ヤ蓋シ總會ヲ招集セシテ書面ノミツ以テ總社員レ同意ヲ得タル事項ハ總會ノ決議ニ非ス總會ノ決議ニ非ナル意思表示ニ對シ之占同一ノ效力ヲ有セシムルハ法律ハ特別ノ規定ヲ要スルモノナルカ故ニ我民法ノ解釋トシナハ此方法ニ依ル總社員ノ同意ヘ總會ノ決議ト同一ノ效力ヲ有スルモハニ非ス(獨逸民法第三二條參照)

等ハ相隣者ノ共有ヲ認ムルヲ例トシ却テ其物ヲ分割スルハ相隣者雙方ノ利益ニ非ナルナリ故ニ法律ハ亦此等ノ場合ニハ分割ヲ認メナルモノトス第二五七條

終ニ共有物ノ分割ノ手續ニ付テ一言セン共有着カ共有物ノ分割ヲ求メタルトキハ共有者ノ協議ニ依リ或ハ現物ニ付テ分割ヲ爲シ或ハ其價額ニ付テ分割スルモノトス若シ當事者ノ協議調ハサルトキハ裁判所ニ其分割ヲ請求スルコトヲ得ルモノトス(第二五八條)此場合ニ裁判所ハ現物ノ分割ヲ爲シ得ルトキハ現物ニ付テ分割ヲ爲スモノトス之ニ反シ現物ノ分割ヲ爲スコト能ハサルトキハ分割ニ因リ著シク其價格ヲ損スルノ虞アルトキハ裁判所ハ其目的物ヲ競賣シ之ニ因リテ得タル賣得金ニ付テ分割ヲ爲スモノトス第二五八條第二項裁判所カ共有物ヲ分割スルノ手續ハ何ニ依ルヘキカ獨逸國ニ於テハ此手續ヲ以テ非訟事件トシ訴訟手續ニ依ラス別ニ共有物分割ノ手續ヲ定メ之ニ據リタリ(「デルンブルヒ近世羅馬法論第二卷第百九十七章第四六二頁參照蓋シ共有物ノ分割ハ其有權ヲ終了セシムル爲メニ行フ所ノ新ナル處分ニ付ス之ニ因リ其有

者ハ新ニ權利ヲ取得スルモノトス故ニ普通ノ爭訟ノ如ク權利ヲ認定スルモノトハ大ニ其性質ヲ異ニス體テ之ニ關シテハ普通ノ訴訟手續ニ依ラス別ニ其手續ヲ設タルヲ據當トス我民法ノ立法ノ趣旨ハ亦此主義ヲ採レルモノト如シト雖モ現行法ニ於テハ未タ其有物分割ノ手續ニ付テ何等別段ノ規定ヲ設ケナリシフ以テ之ニ關シテハ一般ノ訴訟手續ニ依リ之ヲ請求スルノ外途ナシ但之ヲ普通ノ訴訟事件トスルトキハ其性質ノ稍ヤ異ナルモノアルヲ以テ實際ニ於テハ種種ノ困難ナル問題ヲ生スヘシ例ハ現物ノ分割ヲ裁判所ニ請求スルニ當リ當事者ハ裁判所ニ對シテ如何ナル申立ヲ爲スコトヲ得ルヤ又價額ヲ分割ヲ求ムルニ當リテハ如何ナル申立ヲ爲スヘキカ又其目的物ノ競賣ハ如何ニシテ之ヲ爲スヘキヤ等ノ問題是ナリ此等ハ皆法律ヲ不備ヨリ生スル結果ニシテ諸君ハ訴訟法ヲ研究セラルニ當リテハ十分此點ニ留意セラシシヨトヲ望ム

第四編 入會權

卷ハ財團 第一章 入會權の意義は、其體を長闊くハ財團皆變來、既益

入會權ハ我國ニ於ケテ古來存スル一種ノ舊慣上ノ權利ナリ隨テ其性質甚ダ不明ニシテ或場合ニハ共有權ニ類スルニアリ或場合ニハ地役權ノ性質ヲ帶スルコトアリ或場合ニハ債權ノ性質ヲ有スルコトアリ又或場合ニハ一種特別ノ財產權ト認ムヘキモノアリ其性質一定セス是レ一ハ入會權ナル文字ノ用法ハ從來一定スル所ナク地方ニ於テ便宜之ヲ慣用シタルト一ハ入會權ハ地方ニ依リ其特別ノ必要ニ從ヒ隨時其慣習ヲ成セシトニ由ルモノナルヘシ故ニ我民法ハ入會權ニ付テハ其性質ト起源トニ鑑ミ全ク地方ノ慣習ニ放任スルノ主義ヲ採リ入會權ノ性質範圍效力ハ總テ舊慣ニ從フコトセリ而シフ其舊慣ニ反セタル限ハ共有權ノ性質ヲ有スルモノハ共有權ノ規定ヲ適用シ地役權ノ性質ヲ有スルモノハ地役權ノ規定ニ依リ債權ノ性質ヲ有スルモノハ債權テシテ其内容ハ總テ慣習ニ依リ定マムモノト謂フヘシ更ニ言ハセバ之ヲ以テ證子第其實證法數本來大抵謂之其財團及財貨甚為不體モ斯ニ難也

第二章 入會權の性質

上述ノ如ク入會權ハ地方慣習ニ依リ發達シ其權利ノ性質甚タ不明ナルモ概シテ地役權ノ性質ヲ有スルモノ通例ニシテ共有權ノ性質ヲ有スルモノ之ニ亞クモノノ如シ故ニ入會權ハ一見スレハ物權ノ性質ヲ有スルモノノ如キモ其實頗爾錯雜セル意義ヲ有シ單ニ一ヲ權利ヲ表形セルモノニ非ス或ハ地役權ヲ指スコトアリ或ハ共有權ヲ意味スルコトアリ或ハ單純ノ債權ヲ指スコトアリ體ヲ入會權ハ一ノ包括名稱ニシテ一箇特有ノ權利ヲ謂フニ非ス其共有權ノ性質ヲ有スルモノ若クハ地役權ノ性質ヲ有スルモノハ物權ナリト謂フヘク其特別ナル財產權ノ性質ヲ有スルモノハ一ノ財產權ニシテ其債權ノ性質ヲ有スルモノハ亦債權ナリト謂フヘシ之ヲ要スルニ入會權ハ財產權ニ屬スル種類ノ權利ヲ包含スル一種ノ包括名稱ナリ而宜主モ當限ナリトテ今入會權ノ範圍ニ當

第三章 入會權ノ範圍

入會權ハ從來ノ慣例ヲ觀ルニ森林及ヒ原野ヲ目的トスル權利ナリ其物權ノ性質ヲ有スルモノハ直接ニ森林原野ノ上ニ行ハレ其特別ノ財產權若クヘ債權ノ

性質ヲ有スト認ムルモノモ亦森林原野ヲ目的トス故ニ森林原野ヲ目的トスルコトハ實ニ入會權ノ特性ニシテ之ニ依リテ他ノ權利ト區別スルコトヲ得ヘシ或ハ水面ニ付ラ入會權ヲ認ムルノ慣例ナキニシモ非斯例ヘハ海上ニ於ケル漁業ノ入會ノ如キ是ナリ然レトモ此等ノ權利ハ民法上ノ財產權ニ非サルハ明カルモ其慣習ハ頗ル不明ニシテ未タ之ニ權利ノ名稱ヲ付與スルノ價值アルヤハ確定シ難キヲ以テ我民法ハ所謂入會權ノ下ニハ此ノ如キ種類ノ權利ヲ包含セシメスシテ單ニ陸上ノ入會權ニ限レリ入會權ハ此ノ如ク必ス森林原野ヲ目的トル權利ナルモ其權利ノ範圍ニ至リハ亦種種アリ或ハ森林原野ニ關シテ處分權ヲ有スルコトアリ或ハ單ニ使用權ノミヲ認ムルコトアリ而シテ使用權ヲ認ムル場合ニ於テモ或ハ其主產物ニ及フモノアリ或ハ其副產物ニ止マムモノアリ隨テ其範圍一定セス是レ地方ノ慣習ト其必要トニ依リ異ナルモノニシテ其範圍ノ大小ハ自ラ其權利ノ性質ヲモ異ニセツルヘカラナルニ至ル即テ其範圍ノ最モ廣キモノハ共有權ノ性質ヲ有シ此場合ニハ森林原野ニ對シテ一切ノ處分・使用・收益ノ權利ヲ有ス之は次タモノ又ハ地役權ノ性質ヲ有スル場合ニ

シテ森林原野ニ付テ永々使用權又有スルヲ通例此不爾シテ其使用權ハ概モ副產物ニ止マルキ時オシテ之は主產物キ及ワモノアリ債權ノ性質ヲ有ス之場合ハ其範圍最モ狹小ニシテ單元一定ノ時期ニ於テ其使用ヲ請求シ得ルモニモ過キナルナリ蓋々其範圍一宗又ニ景物樹木又開墾ナ其必要非キ地役見尾大根等ハキテ第4章 地役權ノ性質ヲ有スル入會權 第一節 意義

入會權ハ地役權ノ性質ヲ有スルコトヲ常態トス此種類之權利ハ歐洲ニ於テモ存在ス即チ獨逸ニ於テ之ヲ「ワルドキルヴィット」(Waldervieth)若タ「ハイグネルヴィット」(Wegeviertel)ト稱シ重要ナル地役權ノ一種トセリ此權利者羅馬法ニ於テハ之ヲ公認セツラシカ獨逸ニ於テハ慣習上大ニ發達セリ近世ニ至リテハ森林經濟上不利益ナリトシテ漸タ之ニ制限ヲ加スルノ風潮ヲ生スルニ至ルリ我國ニ於テハ此權利ハ數百年前ヨリ各地方ニ存在シ其起源ヲ審ニセスト雖モ概々地方ノ農家經濟ノ必要ニ迫マラレ漸次自然ニ發達シタバ慣習上ノ權利ノナリ

ニシテ頗ル須要ナル權利三屬ス近來ニ至リテハ此權利ニ付テ契約ヲ以テ其内容ヲ確定スルモノ妙カラヌ畢竟此種ノ權利ハ他人ノ所有ニ屬スル森林原野ヲ上ニ存スル一種ノ使用權ニシテ字、大字若ク賃字ノ集合又ハ町村等ノ特定ノ地域ノ便益ノ爲メニ存スル權利ナリ而シテ其目的ハ森林、原野ニ對シテ主トシテ其副產物ヲ採取スルニ在リ所謂副產物ノ採取トハ下草ノ刈取、落葉ノ拾取又ハ放牧等ヲ謂フ蓋シ此等ノ目的ノ爲メニ森林、原野ヲ利用スルハ地方ニ於テ農家經濟上大ニ之ヲ必要トシ若シ之ヲ禁止スルトキ直直チテ此地方農民ノ日常生活ニ支障ヲ生スルヲ以テ漸次ニ森林、原野ノ上ニ發達セシメタルモノニシテ其初回全ク地方人民ノ侵略ニ出テタルコトナリ或ハ森林、原野ノ所有者ノ恩恵ニ出テタルコトアリ或ハ地方人民カ一種ノ善意占有ニ屬シタルモノ遂ニ發達シテ一箇ノ權利ト爲リタルモノアリ地方ニ在リテハ中等以下ノ農民ニハ最も必要ノ權利ニシテ彼等ハ之ニ依リテ森林原野ヲ利用シテ自家ノ經濟ヲ維持スルモノナリ

第二章 典質

第二節 性質

此種ノ入會權、一定ノ地域ノ便益を爲メニ存存ル權利ナリ限于一定ノ地域トハ字大字若クハ字ノ集合又ハ町村等ノ謂キシテ此等ノ部落ノ爲メニ森林原野ヲ使用スルコトヲ目的トシ其部落ニ住スル者ハ一般ニ其利益ヲ享受スルノ原則トス而シテ此入會權ハ(一)特ニ其期間ノ定アルモ外ハ入會權ニ依リテ利益ヲ受タル土地ノ存續スル限り繼續スルヲ常トス(二)此入會權ハ之ニ依リテ利益ヲ受タル土地ヲ離レテ單獨ニ成立スルコトヲ得(三)此入會權ニ依リテ利益ヲ受タル土地ニ住居スル者當然ニ入會權ノ利益ヲ受タルコトヲ原則トス但特ニ條件ヲ附加スルコトヲ妨ケス(四)此入會權ハ其利益ヲ受タル土地ニ住居スル者ノ變動ニ付テハ何等ノ影響ヲ受ケサルヲ原則トス故ニ此種ノ入會權ハ純然タル地役權ニ屬スト謂フヘタ隨テ民法中地役權ノ規定ヲ適用スルコトヲ得ルモノナリ然レトモ民法ハ入會權ニ付テハ深ク其慣習ヲ重シタルカ爲メ入會權カ地役權ノ性質ヲ有スルトキト雖モ必シモ地役權ノ規定ニ依ルコトヲ要す。

ス反對ノ慣習アルトキハ尙ホ之ニ依ラシムルコトヲ妨ゲストセリ是レ民法カ此種ノ入會權ニ付テハ地役權ノ規定ヲ準用スト規定シタル所以ナリ(第二十九四條)入會權ノ利益ヲ受タル土地ハ或ハ町村ノ如ク法人ヲ成スモノアリ或ハ字大字又ハ字ノ集合等ノ如ク未タ法人ヲ形成セサル部落タルコトアリ後ノ場合ニ於テハ部落ハ單一ノ集合體ニ過キサルヲ以テ之ヲ入會權ノ主體ト看ルコトヲ特ス隨テ此場合ニハ此入會權ハ地役權ニ酷似スル一種ノ財產權ト謂ハサルトカラス(第三節 森林原野ニ對シテ其副產物ヲ採取スル權利タルコトヲ常トス故ニ其權利ノ範圍ハ種種アリテ地方ニ依リ慣習ヲ異ニシ亦同也ナラズモ概乎左ノ範圍ヲ超エサルモノトス水草木等ヲ取る事外ニ他無事也水草木等森林原野ニ對シテ其副產物ヲ採取スル權利ナリ唯此兩項ハ前モ述べた如後常トス故ニ其權利ノ範圍ハ種種アリテ地方ニ依リ慣習ヲ異ニシ亦同也ナラズモ概乎左ノ範圍ヲ超エサルモノトス水草木等ヲ取る事外ニ他無事也水草木等森林原野ニ對シテ其副產物ヲ採取スル權利ナリ唯此兩項ハ前モ述べた如後

三 肥料ノ採取

四 放牧

右ノ一二二三ハ合シテ入會權ノ目的ト爲ムコト多シ唯リ四ノ放牧ニ至リテハ別ニ特立スルヲ例トス歐洲ニ於テハ此種ノ入會權ノ範圍一層廣ク之ヲ分チテ二種類トス一ハ森林ノ用材ニ對スル入會權ニシテ一ハ森林ノ副產物ニ對スル入會權トス前者ハ更ニ細別シテ二トス一ハ森林ニ付テ建築用木材ヲ採取スル權利ニシテ一ハ薪炭用木材ヲ採取スル權利ナリ我國ニ於テハ地役權ヲ有スル入會權ハ概シテ森林ノ副產物ヲ採取スルニ止マルモノニシテ木材ニ付テハ薪ノ採伐若クハ枯損木ノ採取ニ止マル然レトモ地方ニ依リ往往立木ノ伐採ノ權利ヲ認ムルヨトアリ又現行法ノ規定ニ於テモ將來地役權ノ性質ヲ有スル入會權ノ一種トシテ立木ノ伐採權ヲ認ムルモ亦自由ニシテ決シテ法律ノ禁スル所ニ非ナルナリ
以上ノ次第ナルヲ以テ地役權ノ性質ヲ有スル入會權ハ其目的ヨリ之ヲ觀察スレハ左ノ如ク分類スルコトアリ

第一 肥料採取ノ權 是レ森林原野ニ付キ下草、落葉等ヲ採取スル田畠ノ肥料ノ用ニ供スルノ權ヲ謂スモノニシテ最モ重要ナル權利ナリ然レトモ其行使ヲ誤ルトキハ之カ爲メニ森林ノ營養力ヲ害シ森林ノ經營及ヒ保存ニ妨害ヲ生スル虞アリ是ヲ以テ歐洲ニ於テハ森林維持ノ爲メニ此權利ニ付テハ種種人制限ヲ設ケリ我國ニ於テモ慣習上種種ノ制限アリ即チ(一)入林ノ時期及ヒ回數ヲ定ムルコト(二)入林ノ區域ヲ確定スルコト(三)携帶ノ用具ヲ限定スルコト(四)採取人分量ヲ制限スルコトノ如キ是ナリ而シテ入林ノ時期及ヒ回數ヲ付テハ地方ニ依リ一定セス概シテ其時期ヲ稱シテ口開又ハ鎌開若クハ山開ト曰ヒ其時期盡クレハ之ヲ山止若クハ口止ト曰ス山止若クハ口止以後ハ其入林ヲ禁ス此禁ニ反スルトキハ一定ノ償金ヲ出ナシメ場合ニ依リテハ其權利ヲ消滅セシムルコトアリ
第二 採薪ノ權 是レ森林ニ付テ枯損木又ハ下草ヲ採リテ各人ノ燃料ニ供スルノ權利ニシテ是レ亦地方農家ニ有用ノ權利ナリ唯此權利ハ勤ミスレハ盜伐ヲ生スル虞アルヲ以テ其權利ノ行使ニ付テハ一定ノ分量ヲ設ケ之ニ嚴重ナル

制限ヲ附スルコトセリ即チ斧鎗等携アルコ下テ許サヌ又荷籠又携用ヲ禁シ

又ハ刈置ヲ禁スル等是ナリ且森林ニ於田へ耕作地等其上ヘ蓋骨

第三 放牧權 是レ森林野野ニ付キ牛馬豚羊ヲ放牧スルノ權利ニシテ我國ニ

於テハ之ニ依リテ牛馬ヲ放牧スルノ例多ク歐洲ニ於テハ之ニ依リテ豚羊ヲ放

牧スルノ例多シ此權利ノ行使ハ之ヲ忽ニスムトキハ亦森林ニ損害ヲ及ボス處

アルヲ以テ之ヲ設定スルニ當リテハ其放牧ノ區域ヲ明定シ其反則ニ對スル制

裁ニ付テ詳細ノ契約ヲ爲スヲ常態トセ照文ヘ裏開キカニ山間ト曰ク其耕種地

第四 林刈取權 是レ森林原野ニ付テ下草等ノ類ヲ採取シテ牛馬ノ飼料ニ供

スル權利ニシテ亦農家經濟上権要ノ權利也此權利ハ概シテ原野ノ上ニ存シ

其權利ノ存スル場所ヲ稱シテ林場若クハ林山ト曰ク此權利ハ何レノ地方ニモ

存シテ放牧權ノ如ク獨立セルモノ非ズ他ノ權利ハ合ジテ一人入會權ヲ爲ス

ノ例最モ多シ而シテ此權利ハ一旦成立スル林ギハ一面ニハ漸漸其範圍ヲ廣メ

他ノ森林地ヲ原野ニ化セシメントシ一面ニハ林場ヲ變シテ森林ト爲シ又ハ耕

地トスルハ頗ル其不利益ナルガ爲ス林場及ビ其近傍ニ於外ル植林及ビ開墾ヲ

妨害セントスル虞アリ之ヲ以テ林場ニ付テハ第一地城ヲ限定スルコト第二威

ルヘク植林地ヲ避タルコトヲ必要トス

第五 立木伐採權 此權利ハ森林ニ於テ其主產物タル立木ヲ伐採スル權利ニ

シテ最モ利益アルモニカリ唯此權利ニシテ地役權ノ性質ヲ有スル入會權ハ極

オテ稀ニ存在シ其權利ハ一部入會ノ性質ヲ有シ概シテ森林メ一部付ク其立

木ヲ伐採スルニ過モサルヲ例トス故ニ此權利ハ特別ナシ契約アル外の地役權

ノ性質ヲ有スル入會權ニハ存在セサルヲ原則トス大ヒ人會權ト稱シ特權

以上述ヘタル五種ノ權利ハ入會權ノ目的ヨリ觀察シタル主要ナル作用ナリト

ス而シテ此種ノ入會權ハ森林原野ノ所有者ニ對シテハ一定ノ賠償ヲ爲スヲ通

例トス其賠償ノ名稱ニ種種アリ下草料山禮并借料生料山草料鍊料鍊手敷料薪

草料鍊役山役下草刈取料等是ナリ其賠償ノ方法ニ或ノ金錢ヲ以テ納メ或ハ米

穀ヲ以テ納メ或ハ人夫ヲ以テ納ムケイ例アリト定セテ森林原野ニ權ニ人會

第五章 共有權ノ性質ヲ有スル入會權

第一節 意義、對象、及入會點

其有權ノ性質ヲ有スル入會權トヘ森林原野ノ共有者カ其森林原野ニ對シ入會シテ其權利ヲ行使スルコトヲ云フ故ニ此權利ハ森林原野ノ共有權ノ行使ニ過キナルナリ實く當事者病弱又不草率出會事請於主保山草、採薪採薪年邊日報木酒也、出會事請於主保山草、採薪採薪年邊日報此種ノ入會權ハ其本體ハ森林原野ニ對スル所有權ナリ之ヲ入會權ト稱シ特別ナル名稱ヲ付與スルハ其所有權カ數人ノ共有ニ屬スル變態ナレハナリ故ニ其權利ノ行使ハ畢竟所有權ノ行使ニシテ其性質ハ全ク純然タル共有權ナリトハ隨フ此權利ニ付テハ民法中共有權の規定ヲ適用スヘキ事ナリ夫會計ハ別當事者直木、森林原野ノ主保山草、其生業者又或立木、對製木、開闢木、此權利ハ其範圍最モ廣ク森林原野ニ對スル一切ノ處分ニ及フモノトス故ニ其

副產物ノ利用ハ勿論主產物ノ收益其他一切ノ利用及ヒ處分ヲ爲スニト得取テ其主ナルモノヲ舉タレハ左ノ如シ

第一 放立木ノ伐採人會計ハ其生業者又或立木、對製木、開闢木等
第二 土地ノ開墾耕種ノ面ハ除草木、荷木、搬木、運木、卸木等
第三 植林木、移木、移植木、剪枝木、施肥木、灌水木等
第四 石材ノ切出木、立木、開闢木、荷木、搬木、運木等
第五 炭燒木、窯木、爐木、燒木、鐵木、鐵鏈木等
第六 採薪木、火木、礮木、土木、開闢木、石木、木、鐵木等
第七 下草刈取木、刈取木、燒木、燒薪木、燒柴木等
第八 放牧收容木、放牧木、燒木、燒薪木、燒柴木等
右ノ如クナルヲ以テ共有權ノ性質ヲ有スル入會權ヲ分析スレバ之ヲ左ノ二種ニ分類スルコトヲ得森林與樹木等ノ天然之財物之應權也於此二種
第一 地盤ノ入會權ハ此權利ハ森林原野共付キ其地盤ノ利用スル云々之ニ
屬スルモノハ土地ノ開墾石材ノ切出及ヒ植林等凡リ土地ノ開墾トヘ森林原野

夫地盤ニ工作ヲ加へ之ヲ田畠若外其地外有蓋地ニ變スルヲ謂フ是レ地盤利用中ノ最モ大ナルモノナリトモ此權利ヤ森林ノ維持保存ノ爲メニ之ヲ制限スル事アリ即チ(一)其森林カ保安林ニ係ルトキニ於テハ絕對ニ之ヲ禁ス(二)其他森林ニ於テモ古林若クハ森林ノ重要部分ニハ之ヲ禁スルコトヲ常トス石材ノ切出トハ森林原野ノ地盤中其地質硬固ニシテ石材ニ供スルコトヲ得ルモノヲ切出ジテ輸出スルヨトヲ謂フ此權利ハ亦地盤ノ重要ナル利用ナレトモ其森林原野ニ及ホスノ關係ハ土地ノ開墾ト異ナルコトナキヲ以テ之ト同一ノ制限ヲ有ス植林トハ森林原野ノ地盤ニ新ニ造林スルコトヲ謂フ是レ地盤ニ關スル最元有益ノ利用ニシテ之ニ關シテハ何等ノ制限ヲ置カサルヲ原則トスルモノ亦往往其近傍ニ耕地ヲ存スル場合ニハ多少ノ制限ヲ存スルコトアリ例へハ其疆界線ヲ去ル一定ノ距離ノ間ハ植林ヲ許ササル如シ此等地盤ノ利用ハ唯リ共同有權ノ性質ヲ有スル入會權ニノミ存スルモノニシテ是レ實ニ森林原野所有權ノ行使ニ過キナルモナドスハ不可

第二 毛上ノ入會權 此權利ハ森林原野ノ地盤以上ノ利用ニシテ之ヲ分ナシ

二トス一ハ主タル毛上ノ入會權ニシテ即チ立木八伐採炭燒等是ナリ立木ノ伐採トハ森林原野ノ木材ノ利用ニシテ最モ有利ナル收益トス然レトモ此利用ハ森林ノ頗廢ノ直接ノ原因ナルヲ以テ之ニ關シテハ森林ノ造營及ヒ保安ノ爲メニ種種ノ制限アリ其制限ノ如キハ各地ノ舊慣ニ依リ一定セスト雖モ其主ナルモノハ(一)保安林ニ付テハ皆伐ヲ禁止スルコト(二)輪伐法ヲ設タルコト(三)特ニ必要アルトキハ造林ヲ命スルコト(四)木材ノ種類ニ付キ伐採年期ノ制限ヲ定ムルコト(五)貯木及ヒ永久禁伐木等ヲ定ムル等ナリ炭燒トハ森林ノ立木ノ枝幹樹根ヲ燃熱シテ木炭ヲ製出スルヲ謂フ是レ立木ニ關スル有益ノ利用ナリ其他様木ヲ有スル森林ニ付テハ樟腦ヲ製出スル如キ亦毛上ノ主タル利用ト謂フヘシ要スルニ此等ノ利用ハ毛上ノ主タル利用ニシテ通常ノ入會權ニ存在セス唯リ其有權ノ性質ヲ有スル入會權ニ存在スルヲ原則トスニハ副タル毛上ノ入會權ニシテ即チ下草刈取林刈取採薪放牧等是ナリ此等ノ利用ハ地役權ノ性質ヲ有スル入會權ト同一ニシテ畢竟森林原野ニ對スル副產物ノ利用ニ過キナルモノトス』以上述ヘタル如ク其有權ノ性質ヲ有スル入會權ヘ其權利ノ範圍頗ル廣シト雖

モ其權利ヲ行使スルニ當リテ、第一其有權之性質上當然其權利者相互ノ利益ノ為メニ制限セラレバ、契約若クハ慣習ニ依ニ種種ノ制限ヲ受ケ一定セザルモ概シテ、其副タル毛上ノ利用ヲ各自ノ自由ニ放任、其他ノ主タル毛上ノ利用及ヒ地盤ノ利用ニ付テ、其收益ハ各權利者間ニ平等ニ分配ズル又以テ例トスルカ如シ。

第六章 債權ノ性質ヲ有スル入會權

第一節 意義

債權ノ性質ヲ有スル入會權トハ、町村若クハ、字大字ハ、地元人民カ森林原野ハ、上ニ一定ノ時期一部ノ使用ヲ為スコトヲ、森林原野ノ所有者ニ請求スルコトヲ得ル權利ナリ。此權利ハ概シテ國有林、御料林、舎上ニ存スル常トス。其主セヨ者、庶民也。但用モ、以セヨ。開カヘば森林、並營販賣ノ器物、貨物等、皆之に付セヨ。此種ノ入會權ハ或ハ町村若クハ、字大字ノ地元人民ニ屬スル一種ノ貸借權ナル。

コトアリ或ハ二種ノ無賃ノ使用權ナルコトアリ。其目的即チ森林原野ヲ一部使用スルニ在リ。其義務者ハ森林、原野ノ所有者ニシテ、其權利者ハ町村若クハ地元人民ナリ。トス蓋シ此種ノ入會權ニハ、其著シキモノニアリ。ハ町村又ハ地元人民カ借貸ヲ納付シ、森林原野ノ一部ヲ一時借用シ之ヲ使用セントスル場合ナリ。是レ純然タル貸借權ニシテ、其期間ノ如キモ五六年ヲ通例トス。ハ町村又ハ地元人民カ特ニ森林原野ニ付テ副產物ノ無料採取ヲ許サレタルカ為メニ又ハ從來ノ慣行ニ依リテ森林原野ニ付テ木竹、薪炭材、下草、株、小柴、土石等ヲ賣渡フ。サレタル為メニ一時森林原野ヲ使用スル場合ニシテ、是レ使用貸借ノ規定ヲ準用スヘキモノトス。又社等ノ上地官林ヲ社寺ノ委託官林トセル場合ニハ之ニ其林地ノ使用ヲ許可シテ、林產ヲ下付スルコトアリ。又一般ニ山林看守人方言ニ山守又ハ步頭ト謂フヲ置キ之ニ其樂酬トシテ、山林ノ收益ノ幾分ヲ付與スルヲ得ル場合アリ。此等ノ權利ヲ稱シテ、入會權ト稱スルノ例ナキニシモ、非スト雖モ此等ノ權利ハ森林ニ對スル權利ナルモ單ニ一人ニ歸屬スヘキ權利ナルカ故ニ、入會權ノ概念ニ適合セス且其慣例ハ一小部局ニ止マルモノタルヲ以テ此種ノ權

利ハ入会権ノ中ニ包含セズトスルヲ可ナリトス。又其範囲ハ森林原野ニ對スル一部ノ使用ノ目的トスルモ其權利ノ範囲ナ。其契約ニ依リ種種ニシテ一定セスニシテ當事者ノ協定スルヲ以テ標準トセサルヘカラス故ニ或ハ主產物ノ利用ヲ包含スルモノアリ或ハ副產物ニ止マレコトアリ其使用期間ニ付タモ或ハ五六年ニ至ル場合アリ或ハ一年限ニシテ毎年更新スルコトアリ概シテ質貸借ニ属スルモノハ前者ニ屬シ其他ハ後者ニ属ス要スルニ其範圍ハ一一当事者ノ契約ニ依リコ定アルモノナリ。又其副產物若クハ

第三節 範圍

此種ノ入会権ハ森林原野ニ對スル一部ノ使用ノ目的トスルモ其權利ノ範囲ナ。其契約ニ依リ種種ニシテ一定セスニシテ當事者ノ協定スルヲ以テ標準トセサルヘカラス故ニ或ハ主產物ノ利用ヲ包含スルモノアリ或ハ副產物ニ止マレコトアリ其使用期間ニ付タモ或ハ五六年ニ至ル場合アリ或ハ一年限ニシテ毎年更新スルコトアリ概シテ質貸借ニ属スルモノハ前者ニ屬シ其他ハ後者ニ属ス要スルニ其範圍ハ一一当事者ノ契約ニ依リコ定アルモノナリ。又其副產物若クハ

第七章 入会権二關スル特種ノ權利

以上述ヘタル入会権之種類ノ外ニ尙ホ特種ノ入会権アリ即チ地役權ノ性質ヲ有セス、其有權ノ性質ヲ有セス又債權ノ性質ヲ有セタル入会権アリ例ヘハ法人ヲ形成セタル字若クハ大字ノ便益ノ爲メニ森林原野ニ對シテ其副產物若クハ

ルカ故ニ邊界ノ法律ニ從ハスト然レトモ領事裁判権ニ從フノ權利アルモ追放ヲ受ケシテ可ナリトノ權利アルモノニ非ス領事裁判権ハ裁判ノ問題ニシテ追放ハ裁判ノ問題ニ非ス千八百九十八年獨逸カ國境ニ在ル丁抹人ヲ追放シタルカ如キ或ハ塊國人ノ獨逸ニ在ル者ヲ追放シタルカ如キハ其實例ナリ要スルニ國法ヲ以テ定ムル所ニ據ルモ條約又ハ學會ノ議決ニテ定ムル所ニ據ルモ如何ナル理由ヲ以テスルモ追放スルコトヲ得ヘタ又縱合之ヲ定メサルモ國家ハ追放スルコトヲ得ヘキ權利ヲ有スルナリ。又千八百九十二年西歐各國アリテ尚ホ茲ニ附帶シテ説明スヘキヨトハ國家ハ追放ノ權利ヲ有スレトモ此義務ヲ有スルモノナルセ否セノ問題ナリ「ブルタリン」ノ如キハ義務アリト主張シ予モ亦之ヲ贊成スル者ナリ例ヘハ康有爲カ日本ニ來リタルトキ支那ハ日本ノ友親國ナレハ友親國ノ制セントスル者ヲ保護シテ日本ニ居住セシムルハ友親國ニ對スル友誼ヲ缺クカ故ニ此ノ如キ者ハ日本ヨリ追放スル義務アルカ如キ是ナリ又或ハ甲國人カ乙國ニ於テ甲國ノ秩序ヲ亂シントキハ乙國ハ十分ノ取締ヲ爲サナルベカラサル義務アリ然ルニ十分之ヲ取締ルコト能ハサルト

キバ又追放スルノ義務アルナリ要スル云此問題ベ國家ハ外國人ノ内國ニ在ル者ノ行爲ニ付テ責任ヲ負フガ否ヤノ問題ニ歸著ス「グフケン」曰ク手段カ不十分ナリトノ抗辯ハ許サレヌト予モ亦此說ヲ採用者ナリ何トナレヤ國家ハ自國人ヲ取締ルコトヲ得サル抗辯ヲ爲スニト能ハサルト同シタ外國人ヲモ取締ラズルヘカラサレハナリテノ間ハ眞正義也日本ニ於テ又或ノ事支那ノ日本ニ或追放ノ手續ハ各國ノ法律ニ依リテ異ナリ瑞西ノ如キハ行政處カ十分ノ審査ヲ爲スヘキモノトセリ實例ニ依レハ追放ノ前ニ豫告スルコトヲ例トス千八百六十一年獨逸人「エトワードライ」ニ豫告ヲ爲シ千八百七十二年西班牙人「ドンカルス」ニ豫告シタル如キハ其一例ナリ次ニ追放セラル者ノ本國ニ追放ノ通知ヲ爲スヘキモノナリテ如キハ獨逸人ノ如貴ノ如火ニ及ハ御ニ斯ムノ威親又ハ夫カ追放セラルルトキハ其子又ハ妻モ共ニ追放セラルルモノナリヤ夫レ追放ハ一身ニ専屬スヘキモノナレハ當然子又ハ妻ニ及フモノニ非ヌ茲又次ニ追放ノ效果ヲ述ヘシニ追放セラレタル者ハ其土地ニ居住スルヨリ能ハスルモノニシテ唯リ其國ヲ退去セサルヘカラサルノミナラヌ既ニ一旦退去シタ

ルトキハ再ヒ來ルコト能ハサルナリ但「バイエルン」ノ法律ニアハ一定ノ年限ヲ過クルトキハ此限ニ在ラストスルノ特例アリ更ニ追放ノ效果トシテ茲ニ論定セサルヘカラサルコトハ追放ノ命令ニ從ハサルトキ及ヒ一旦追放セラレタルモ再ヒ來ルトキハ如何ニスヘキヤ是ナリ是レ各國ノ法律ニ於テ定ムヘキモノシテ再ヒ來ルトキハ單ニ再ヒ追放スヘントスルモアリ又ハ刑罰ニ處スルトスルモアリ又獨逸ノ如ク再度來ルトキハ追放シ其後更ニ來ルトキハ刑罰ヲ科シテ追放スト爲スモノモアリ莫ニ一勞永逸ノ如ク猶可然ニ貴モ其間豈足持之哉モ追放ヲ爲ス權限ヲ有スル官廳ハ何レナリヤ立法論トシテハ種種アレドモ今日ハ行政處ニナレ爲スヲ通例トス日本ニ於テハ明治二十七年勅令第三十七號ヲ以テ内務大臣、府縣知事ニ此權ヲ與ヘタリ瑞西「バイエルン」ニテハ行政處ニ於テ之ヲ決定スヘシト爲セリ又行政處ニ此權限ヲ與ヘナルハ英國ナリ同國ハ原則トシテ追放ヲ認メサルカ故ニ若シ追放セントスルトキハ國會ニ於テ議決スルモノトス尙ホ追放セラレタル者ハ追放セラル國家ヲ訴フルヨトヲ得ガヤ否ヤソノ問題アリ

之ニ關シテハ何レノ國ノ法律ニ於テモ規定スル所ナシト雖モ早晚攻究スヘキコトナリ例ヘハ府縣知事ノ爲シタル追放ニ付テハ内務大臣ニ内務大臣ノ爲シタル追放ニ付テハ國會ニ對シテ訴フルカ如キ是ナリ又開會三議院議員議事
大會大會
國家ハ郵便行政ニ關シテ主權ヲ有スルヲ以テ如何ナル方法ヲ採ルモ自由ナルヲ原則トス然ルニ或理由ヲ以テ此權利ノ制限ヲ受クルコトアリ萬國郵便同盟ニ依リテ拘束セラルモノヲ以テ一般ノ制限ト爲ス尙ホ此同盟以外ニ於テ特別ニ拘束ヲ受クルモノアリ例ヘハ明治八年ニ至ルマテ日本ニ於テハ英吉利佛蘭西カ其國ノ郵便局ヲ設置スルコトヲ許シ日本ヨリ外國ニ差立ツヘキ郵便物及ヒ外國ヨリ日本ニ來スル郵便物ヲ總テ此外國郵便局ニ於テ取扱ヒタリ今日ニ於テモ朝鮮及ヒ支那ニハ日本ノ郵便局アリ又土耳其ニ於テモ歐洲各國ノ郵便局アリ是レ皆主權ノ制限ナリ此種ノ場合ニ於テハ郵便切手ノ收入ニ於テモ其國ニ屬セス外國ニ屬スルコトト爲ルナリ而シテ斯ル制限ヲ受クルハ一國

ノ制度整頓セサルトキニ於テハ又已ムヲ得ナルノ事情ニ出ツ明治八年前ノ日本現在ノ支那朝鮮及ヒ土耳其等ニハ實ニ此事情ノ存スルヲ以テ郵便行政上ノ主權ノ制限行ハルルモノナリ一般ノ開明國ニハ斯ル制限行ハルルコトナシ今日郵便行政權ノ制限中最モ顯著ナルモノハ千八百七十八年ノ萬國郵便同盟ナリ日本モ此同盟ニ加入セリ此同盟ニ加入シ條約ヲ遵奉スルニ因リ國家ハ主權ノ制限ヲ受ク而シテ此制限ハ甚タ好果ヲ有スルモノナリ若シ此制限ヲ受ケシテ各國隨意ニ郵便行政ヲ爲サハ世界ノ郵便行政ハ圓滑ニ行ハレタルヘシ故ニ同盟條約ノ存在即チ主權ノ制限カ却テ郵便行政ノ敏活ナル効ヲ爲スニ至ルモノナリ此同盟ノ利益ヲ擧クレハ(第一)世界ノ郵便税同一ナムコト及ヒ(第二)郵便物ノ通過ニ特別ノ手數料ヲ徵セサルコト等ナリ

萬國郵便同盟ハ一千八百七十八年七月一日巴里ニ於テ成立シ萬國郵便同盟中央事務所ヲ瑞西・ベルソニ設ケ毎月郵便同盟ト稱スル雜誌ヲ發行シ英佛獨三國ノ語ヲ以テ記載ス此事務所ニハ所長ニ兼屬セル一人ノ吏員アリ事務所ハ萬國郵便同盟ノ事務ヲ取扱フモノニシテ同盟會ノ開會、報告會費ノ徵收等ヲ司ル本會

一七年毎ニ會議ヲ開ク千八百七十四年ニ本會ト同一性質ノ同盟會起リシカ乎
八百七十八年ニ本會起リ第一回ハ巴里ニ第二回ハ葡萄牙ノリサボンニ第三回
ハ維納ニ第四回ハ亞米利加合衆國「シントン」ニ開キ最終ニ於テ支那及ヒ朝鮮
モ同盟ニ加ハルコトト爲レリ此同盟ニ依リテ第三ノ便利ナル點ハ其郵便物ト
シテ取扱フ物ノ範圍甚タ廣キコトナリ
以上ノ同盟ニ加ハリタルヲ以テ或國家ハ他ノ國家ト異ナリタル條約ヲ締結ス
ルコトヲ妨ケヌ即チ一層精密ナル又ハ爾他ノ方法ヲ講スルコトハ此事業ノ發
達ニ取りテモ亦決シテ尠カラナルモノナリ
萬國郵便同盟ノ外ニ萬國電信同盟アリ千八百八十五年五月十七日巴里ニ起レ
リ此同盟モ亦中央事務所ヲ「ベルン」ニ設ケ萬國郵便同盟事務所ト同所ニ置ク事
務所ヨリハ佛文ヲ以テ雑誌ヲ發行ス此同盟ノ郵便同盟ニ比シテ是ラナル所ハ
世界一般電信料ノ同一ナラサルコトナリ各國ハ屢々之ヲ同ニセんコトヲ主張

シタレトモ今日ニ至ルマテ未タ行ハレス千八百八十四年巴里ニ於テ「海底電線
保護ニ關スル萬國條約」ナルモノ成立シ今日ニ於テハ世界ノ各國悉ク皆之ニ加
ハレリ此同盟條約ニ定ムル所ハ海底電線ヲ破毀スヘカラサルコト若シ之ヲ犯
セハ損害賠償ヲ命スヘキコト等はナリ

戰爭中ニ於テハ海底電線ヲ切断スルコトヲ許ス否セヤ往往議論ト爲リ學說
モ亦種種ニ分歧セリ或學者ハ如何ナル場合ニ於テ切断スルコト能ハス何ト
ナレハ萬國互ニ平和的ノ交際ヲ斷絶シ又ハ經濟的恐懾ヲ來スカ如キコトアル
ヲ以テナリト或學者ハ交戰國間ニ通スル電線ヲ切断スルモ差支ナシ何トナレ
ハ戰爭ノ用ニ供セラルノ恐アレハナリト唱フ以上二說ノ外第三說ハ交戰國
ト中立國トニ通スル電線ヲ切断アズストメ說ナリ此說更ニ二ニ分ル一ハ中
立國ト交戰國トノ間ニ通スルモノニシテ戰爭ノ爲ネニ用ヒラレサルモトハ切
断スヘカラストシニハ中立國ト交戰國トノ間ニ通スルモノニシテ戰争ノ爲ヌ
ニ用ヒラレサルモノ切断スルコトヲ得ベシト云フナリ今はニ於テハ最後ノ
說最モ強力ヲ占ム此說ノ論據ハ電線ハ常ニ平和ノ爲ネニ用ヒラレサルモトハ切

戰爭ノ爲メニ用ヒラルルヤモ測ルヘカラサルヲ以テ切斷スルコトヲ得ト云フニ在リ然レトモ此說ハ論理ニ於テ誤レリ何トナレハ戰爭ノ爲メニ用ヒラレナル電線ヲ切斷スルノ必要ナキモノナビハナリ尙キ海底電線監督ニ付テハ電線ヲ破毀シタル船ハ何國ノ軍艦之ヲ認ムルモ其軍艦所屬ノ法律ニ依リテ間セラル又各國ハ此電線ヲ保護スル爲メニ法律ヲ發スルノ義務アリニシ松原一ヘ中

第三款 電話

電話ニ付テハ今日ニ於テ萬國同盟ナシ其理由ハ此事業ノ生シヲヨリ未タ年ヲ經ナルト長距離ヲ經過セルモノナキトニ依ルナリ然レトモ電話ニ關スル條約ハ存セサルニ非ス例へハ千八百九十五年ノ白耳義ト和開トノ條約ノ如キ是ナリハ日本割譲マ矣たゞセドモ君島ナリ

第四款 鐵道

交通行政ニ對シテ重要ナルモノハ鐵道ナリ各國ハ鐵道ニ付テモ亦自國主權ニ

依リテ自由ナル行動ヲ爲スコトヲ得ガモノナリ歐洲ニ於ケア鐵道ハ常ニ各國ヲ經過スルモノ多ク一列車ニシテ數箇國ヲ通過スルモノアリ此等ノ場合ニ於テ自國主權ヲ絶對ニ行使セバ一國ノ境界ニ於テ一列車ヲ交替スル等ノ事ヲ爲スナルヘカラサクヘク爲メニ非常ナル勞力ト費用トヲ要ス故ニ行政主權ノ萬能ヲ制限シ此制限ニ依リテ利益ヲ受ケントナリ萬國鐵道同盟ナルモノナキモ一千八百九十年佛獨伊、白、露、埃、拉、蘭、瑞、西、哥、克、塞、尼、波、魯、葛、西、九箇國間ニ鐵道貨物同盟ナルモノ生シ千八百九十七年丁抹之ニ加ヘタリ尙ホ此他國ト國土ノ間ニ特別ノ條約ヲ設クルモノ數多アリ就中有名ナル條約「ナンゴタウ」ノ鐵道ニ關スルモノナリ此鐵道ヲ開墾スルニ付テ伊、獨、瑞、三國各經濟ヲ支出シ墾道ヲ造リタリ

第五款 自度量衡

度量衡ニ關スル同盟ハ一千八百七十九年巴里ニ起リ其條約第一條ヲ以テ本同盟ハ學問上ノ同盟ニシテ政治上ノ同盟ニ非ナルコトヲ明カニシ又本同盟ノ中央事務所ニセバ一人ノ所長二人ノ助手不定數ノ事務員ヲ置タニシ、各國十四名ノ委員會ニ付テ

貿易由スコト及ヒ英年毎ニ開港スルヨ洋等ヲ規定メテリ 本同盟ノ加盟モル矣
ノ銀甲七箇國ニシフ英吉利之國加盟モスヘセイモ既ニセバ本同盟ノ中央
支那海ニ關スルハ開港一千八百五十度半四里ニ戲キ其制限一義モ思モ本開港

第六款 貨幣

貨幣ニ付テモ亦主權ノ自由存スルヲ以テ外國ノ貨幣ヲ使用セサルヘカラサル
ヲ義務ナク又如何ナル貨幣ヲ造ラサルヘカラス事云フカ如キ義務ナシ若シ此
義務アリトセハ貨幣行政権ノ制限ヲ受ケタルモフナリ此制限ヲ蒙ルアルト御
テ國家ノ便利ナリ各國共通ノ貨幣ナルカ為タニ受タル所ノ不利益ハ測ル事有
ラサルモノアリ而シラ唯リ金錢上ノ不利益フミナラス兩替等之費該所ノ時間
ニ於テモ亦決シテ尠少ニ非ス然ラド雖モ世界各國同様貨幣ヲ使用スル事
ム到底不能ノ業ナリ子ノ考フル所ニ依レハ唯貨幣ノ單位ヲ各國同一耳セム尼
シリ財信ス例挙一法庫止麥ト圓算其之を包含取ル銀若クハ金ノ分量ヲ同
一二三枚ヘラ此ノ如クヌ事我國ノ一圓即何此英國ニ於テモ通用スル合ト爲
ルヲ以テ前述ノ不便ナキニ至ルハ勿而シテ此事業極妙ヲ容易ナリ事難解

日ニ至ルヤテ未タ實行ノ緒ニ就ケス唯貨幣ニ關スル同盟ニ至ル事ナラ日本拉丁同盟
ト謂ヒニラ「スカンジナビヤ」同盟ト謂ア前者ハ四國ヨリ成リ後者ハ三國ヨリ成
ル拉丁同盟ハ千八百六十五年ニ起レリ本同盟ハ貨幣ヲ鑄造スルニ際シテハ名
稱ヲ異ニスルモ實質ニ於テハ金ニ付テ銀十五二分ノ一ト定メタリ此同盟ノ
採用セル方法ハ世界萬國三行ハレ得ルモメニ拘ハラス今日然ラサルハ伊太利
カ誠實ヲ守ラサリシヲ以テナリスカンジナビヤ同盟ハ千八百七十三年五月二
十七日ヲ以テ締結セリ今日ニ於ケル貨幣ニ關スル行政主權ハ嚴格ニ行ハレタ
ルモ各國ノ信用増加スルニ隨ヒテ行政主權ノ制限ヲ見ルニ至ルヘキカ如開港
セムハ今日登國ノ事ニ付シテハ開港ニ付シテハ開港ニ付シテハ開港ニ付シテハ
衛生ニ關スル行政主權モ亦各國之ヲ有ス故ニ外國ヨリ制限セラル事トナリ
例ヘハ一國ハ他國ノ醫師ヲシテ開港セシメサルヘカラサルノ義務ヲ負カス又
産婆ニ付テモ之ト同一ナリ然レトモ今日ノ日本ハ外國ノ免狀ヲ有スル醫師ヲ
シテ日本ニ於テモ開港セジタルコト下ト爲セリ殊ニ國境ヲ接スル國共於テハ多

クハ外國ノ醫師ヲシテ診察治療ヲ爲サシムル所トア許ス是レ條約若クハ國法ヲ以テ定ムル所ナリ。是レ條約若クハ國法各國共同ノ條約ヲ締結セサルモ國際法上認ヌラレタルモアハ檢疫ノ爲シ黑死病ノ流行シタルトキ之ヲ行ヒ大ニ效ヲ奏シタルヲ以テ離隔檢疫ヲ爲スコトハ今日各國ノ認ムル所ナルモ軍艦ニ對シテハ之ヲ爲ナス

虎列刺病ニ付テ萬國條約ヲ締結ゼン爲メ那破翁三世ハ千八百五十年ニ數國ノ代表者ヲ集メテ會議ヲ開キタルモ其效ヲ奏セス千八百五十九年、千八百六十六年、千八百七十四年、千八百八一年及ヒ千八百八十五年ニ各國ニ開會シ千八百九十二年伊太利ノ「ウニス」ニ於テ、千八百九十三年獨逸ノ「ドレスデン」ニ於テ、千八百九十四年佛蘭西ノ巴里ニ於テ會議ヲ開キタリ此條約ノ規定セル主導ル事項ハ船ヲ分チテ病船嫌疑船及ヒ健康船メ三ト爲スコト各國ハ國法ヲ以テ虎列刺病退治ヲ爲スノ方法ヲ定メ自國ニ病者アレハ之ヲ各國ニ通知シ物品ハ輸出ヲ許サス及ヒ嫌疑船ニ對シテ消毒ヲ行フコト等ヲ約セリ亞細亞ハ之ニ加盟セリ

セサルモ歐洲各國ハ概子之ニ加盟セリ

千八百九十七年即チ明治三十年三月十九日伊太利「ウニス」ニ於テ歐洲各國會議ヲ開キ黒死病撲滅條約ヲ締結セリ當時印度孟買ニ於テ黒死病大ニ流行シタルヲ以テ歐羅巴ニ傳播セサルノ準備ヲ爲セルナリ此同盟條約ノ標題虎列刺同盟條約ト同一ナルモ検疫ヲ爲スニ當リ船中ニ醫師アル場合又ハ乾燥煖爐アルトキハ寛大ナル取扱ヲ爲スコト爲セリ。茲又本邦政府は花柳病ガリ千八百九十八年アリニタニシテ府ニ於テ各國ヨリ委員ヲ派遣シテ萬國花柳病會議ヲ開キシカ萬國條約ヲ締結ヲ見ルニ至ラスシテ終レリ第二回ハ今年開クル答ナリ是レ虎列刺「ベスト」ニ次テ恐ルヘキ疾患ト看做シタルカ爲メナリ。日本亦同尙ホ人類以外ノモノノ病氣ニ付テ國際的保護ヲ與ヘタバモ入出港犬病一時各國ニノ條約ヲ以テ豫防セシカ佛國ニ「バスクール」下云「凡大家恐犬病患者ニ注

射スル藥ヲ發明シタル以來條約ハ自然消滅セリ又萬國鳥類保護會於リ「條約案」
出テタルトモ成立セス(又「トリシング」海ノ獵虎獵保護條約千八百九十九年)アリ
「ワシントン」ニ於テ定メタモノ是ナリ又「オハイ河ニ鱈ヲ捕漁スルコトヲ制限
シタル條約アリ是レ公海自由ノ原則ヲ制限スル行政權ノ制限アリ又最モ必要
ア感シツツアル牛疫家畜病ニ關シテハ未久何等ノ萬國條約ナシ而此會議ニ開
植物ニ付テハ歐洲大陸ニ於テハ葡萄牙ニ繁殖スル毛蟲ヲ驅除スル條約アリ千
八百八十年ニ成立シ後千八百九十八年佛、獨伊、西和、白ル、美ニ、葡等十一箇
國ニ於テ之カ條約ヲ締結シタリ】
尚ホ此以外ノ權利ニ關スル制限ハ萬國工業所有權保護同盟條約ノ如シ此同盟
ハ千八百八十三年ニ成立セルモニアリ又著作權保護同盟條約國際測量同盟千
八百六十四年稅率公布同盟條約「ブリュッセル」事務所ヲ設ケ英、獨、佛伊、西五箇
國ノ語ニテ機關雜誌ヲ發刊セリ萬國航海會議本年セントピーターブルク
ニ開會三十日半期を過却三十日三月三十日式日電太陽「ヨシ」と然モ斯時各國會
子ヤハチノ頃開會圖ハ遊キ立ニ威風ナリ

第八款 奴隸賣買
奴隸賣買ナシル事務所ヲ設ケテ國家ノ長期ノ比較ニ據シテ時事
難解ナリ故ニ「各國」ノ名前ナシル事務所ハ亦國家ノ土賦ニ關
奴隸賣買禁示同盟條約千八百十五年、英、法、普、俄四國ニ「ビゲナ」條約ヲ締結
シ左ノ事柄ヲ約定スルリ茲第ニテ再び記述セシムニイタク詳述シテ
ミニイ各國各奴隸賣買ヲ禁示スルコトヲ國法ニ於テ制定スルヨトハシテ
シテ大洋ニ於テ奴隸ヲ賣買スル船ヲ發見スル者キハ如何ナル國フ軍艦モ之
スルマラ搜索スルコトヲ得ムカシテ多額賞金ヲ與付ケ
ミニ「之ヲ」搜索シテ發見シタルトキハ捕拿タム國ノ裁判所ニ於テ裁判權ヲ有
國際裁判スニ「一船アリ」ハ直列泊處置ニシテ或國遂ニ處罰、國家、士兵、並用
然レトモ此條約ヘ終ニ完備ナル效果ヲ見ルニ至ラスシテ終リ後千八百十七年
及ヒ千八百十八年倫敦ニ於テ會議ヲ開キ後「エキスラシヤベル」ニ於テ開キ千八
百二十二年西班牙主於テ開キシカ何レモ皆實行ヲ見、後千八百八十九年ニ至
リ「ブリュッセル」ニ於テ各國ノ條約ヲ締結シテ始メテ該條約ヲ實行國會至ルリ
此條約ヘ千八百八十五年ノ「ヨシナ」條約ニ胚胎シタルモノナリ此他支那ノ「タ

ト「苦力(勞働者)」ナ賣買ヲ禁スルモノ、信教ノ自由ヲ與ヘサルヘカラヌとスル
條約労働者重三職工保護同盟條約(一千八百九十年歐洲大國十三箇國柏林ニ集リ
オ會議ヲ開キシカ成立セザリシナリ)海外移住ノ自由(同前成立セス等アリ)至
此一千八百十八年、
第九款 國際地役 國際地役ニ二種アリ一ハ積極的地役ニシテ或國家カ或他ノ國家ノ土地ヲ使用
スルコトニシテ承役國ヨリ云スクトキハ國家ハ外國ヲシテ自國ニ於テ爲害シメ
シテ可ナムコトヲ爲サズムルモノニシテ要役國ヨリ觀レハ國家ハ外國ニ於
テ爲ス能サズムコトヲ爲スモノナリ又消極的地役トハ自國カ土地ニ關シテ爲
スコトヲ得ヘキ權利ヲ爲サオルコトナリ例へ千八百六十七年ムルクセンブ
ルヒ條約ニ於テ自國ノ城塞ヲ破壊シテ再ヒ築城セサルコトヲ約定シタルノ類
是ナリ以上ノ事實ハ各國及上學者ノ悉タ認ムル所ナレトモ獨逸ノ學者中ニ此
權利ニ地役ナル名稱ヲ附スルハ不可ナリ地役トハ物權ニシテ國家ノ土地ニ關
スル行政權ノ制限トシテノ權利ニ非ス故ニ國家ハ外國ノ土地ニ對シテ物權ノ

一タル地役權ヲ有スルコトナシ左レハ土地ニ關スル行政上ノ一制限ナリト謂
フヘシト論スル者アリ
第三節 立法權 國家カ立法ニ關スル權利ヲ有スルコトハ特ニ説明スルノ要ナシ而シテ此立法
權中ニハ國家カ憲法ヲ制定變更スル權利ヲモ包含スヘシ然ルニ此變更ニシテ
他ノ國家ニ關係ヲ及ホスヘキ場合ニ於テ始メテ國際法上之ヲ論究スルノ必要
ヲ見ルナリ若シ一國ノ憲法カ外國ニ保證セラレアル場合ニ於テ其保證ヲ與フ
ル國家ハ保證ヲ受タル國家ノ憲法變更ニ關シ容喙スルコトヲ得ヘキモノキス
是レ即チ其國家間ノ條約ニ因リテ始メテ生スルモラニシテ國家ノ有スル立法
權ニ對スルモノ例外ヲ爲スモアトスル例外ハ一事説明スルノ必要ナキヲ以
テ之ヲ述ヘス又法律ヲ公布スル權利等ニ至リテモ他國ノ主權ノ下ニ立ツベキ
モノニ非サルハ説明ヲ俟タサルナリ

第四節 形式上ノ權利

形式上ノ權利ハ之ヲ有セナルモ國家の存立ニハ妨害キモノナリ此權利中重ナシモハ國家ノ名稱元首ノ名稱徵章及ヒ各國人席順是ナリシテ必要ナリ也第一之國家ノ名稱、國家ハ如何ナル名稱ヲ用フクモ自由ナリ然レトモ之ニノ制限アリ即チ國家ハ外國ノ名稱ヲ用フルコト能ハスト云フコト是ナリ茲元ノ疑問ハ國家ハ自國ニテ用ヒシムルノ權利アリヤ否ヤ是ナリ英國公使館ノ國旗等ニ就キ故ニ英國公使館ノ國旗等ニ就キ英國公使館ノ國旗ヲ破ルトキハ英國ヲ侮辱スルコトト爲ルノ類是ナリ之ヲ要スルニ國家ノ形式ハ國家ヲ代表スルモノナレハ形式ニ危害ヲ加フルトキハ國家其モノニ危害ヲ加ヘタレト同一ニ歸スルモノナリ而シテ二國間ノ條約ニ於テハ各自國ニ取ル原本ニ自國ノ名ヲ先ニ署スミ式ハ士旗ニ關スル者為止く一傳聞セリ

第四席順大羅馬法王ノ勢力旺盛ナリシ頭法王ハ各國ノ席順ヲ定メタリ後中世ニ至リ法王ノ勢力衰フルト共ニ此順序モ變ニタリ其後ハ抽籤ニテ定メタルコトアリ又委員ノ年齢著任ノ先後「アルバニア」順等ニ依リテ定メタルコトアリシカ各國ノ間ニ紛争ヲ起シハシニ戰争ヲ爲シタルコトサヘアリ今日ハ慣例上國名ノ「アルバニア」順ニ依リテ定ムルコト爲レリ若シ二國以上ノ頭字同音ナルトキハ次字ノ「アルバニア」ニ依リテ定ム然レトモ國名ハ之ヲ呼フ國語ニ依リテ發音ヲ異ニスルコトアリ例へハ我國ノ如キハ我國ニテハ日本ト云ヒテ「N」ニ位スレトモ一般ニ外國ハ之ヲ「ニ」位セシム獨逸ハ獨逸ニ於テハ「D」ニ位セシムレトモ英國ニテハ「ジャーマニ」ト呼ビテ「G」ニ置キ佛國ニ於テハ「アルマニギニ」ト云ヒテ「A」ニ置クカ如シ此場合ニ於テハ慣例上佛語ニテ呼フ「アルバニツト順トセリ」

第五章 國家ノ義務
國家ノ權利ニ對スルモノハ國家ノ義務ナリ唯例外トシテ權利ニ對シテ義務ナリ

キモノアルコトヲ記憶スヘシ如何ナルモノヲ國家ノ義務中ニ説クベキヤ問
題ナリ或人ハ干渉フ國家ノ義務中ニ入レテ國家ハ或場合ニハ干渉ヲ受ケサル
ヘカラナル義務アルモノニ非ス又國家ハ外國ニ干渉スルノ權利ヲ有スルモノニ
非ス故ニ干渉ヲ國家ノ權利義務中ニ入ルハ不當ナリ此學者ヘ何故ニ權利ノ
中ニテ干涉ヲ説明セサリシヤ予ノ解スルコト能ハサル所ナリ即チ或事ニ付テ
ハ權利ノ方面ヨリ説明シ或事ニ付テハ義務ノ方面ヨリ説明スルハ頗ル不當力
ル方法ナリ又或人ハ犯罪人引渡ヲ國家人権利義務中ニ入ルト雖モ犯罪人ノ
引渡ハ國家ト國家トノ條約ニ依リテ生スル所モノニシテ條約上ノ義務ナル
カ故ニ之ヲ國家ノ権利義務中ニ入ルハ誤ナリ又或ハ國家ノ権利ノミヲ舉ケ
テ義務ノコトニ付テハ一言モ説明セサル者アリ又或人ハ國家ノ犯罪ナル文字
ヲ用ヒテ國家カ或義務ヲ履行セサルトキハ國家ノ犯罪ナリト云ヘリ是ハ義務
ト義務ノ結果トテ同一視シタルモノニシテ此説ヲ批難スル者ハ曰ク義務ヲ怠
リタルトキヲ犯罪ト謂フハ其原因ヲ除キ結果ノミヲ論シタルノ縁アリト予バ

此説ヲ辯護シテ國家ノ權利ヲ説キタルヲ以テ義務ヲ説明シタルニ止マリ義務
ノ結果ヲ論シタルハ不當ノ説明ニ非スト云フ者ナリ國家カ或權利ニ對シ如何
ナル義務ヲ履行セサルヘカラナルヤニ付テハ明ルナル慣習又ハ規定ナシ故ニ
此義務ヲ怠ルトキハ通常如何ナル制裁アリヤフ説明スヘタ他ノ一國家ハ如
何ナル行為ニ付テ責任ヲ負フヘキヤ論スヘキモハナリ事務ノ體裁又裏敷
國家カ其行為ニ付テ責ヲ負ハナルヘカラナルコトハ勿論ナレトモ國家自ラ行
爲スコトナク常ニ必ス代表者ヲシテ代理人代リテ行爲ヲ爲ナシム所モノナリ國
家ノ行爲ハ總テ代表者ニ依リテ爲サレタルモノナレトモ代表者ノ行爲ハ總テ
國家ノ行爲ナリト謂フゴト能ハス即チ代表者ノ行爲カ國家ノ命ニ反シテ爲シ
タルモノナルトキハ國家ノ行爲ニ非ナルナリ故ニ代表者ノ行爲ヲ別大類ニ
(二) 代表者カ國家ノ命ニ反シテ爲シタル行爲ニシテ私ノ行爲大殊私人行爲ニ
爲スニ當ル事例ハ英國ニ國王ハ自己の意思により然ヘニ其職へ土崩階級

對シテ國家ハ責ヲ負ベサルヘカラサルモノニ非ス然レドモ總て私ノ行爲ニ付テ責ヲ負ハスト云フニ非シテ國家ノ命ニ反シテ爲シタル者ヲ監督スルノ責ニ任セサルヘカラス例ヘハ清國全權大臣崇厚カ露國トハリガ保約ヲ締結スルニ當リ伊犁地方ヲ露國ニ割譲スルコトヲ約シタリ然ルニ崇厚ハ土地割譲ノ權利ヲ有セサルカ故ニ清國ハ此責ヲ負フヘキモノニ非ス然レドモ崇厚ヲ全權大臣ニ任シタルハ輕率ナリシトノ責ハ負ベサルヘカラサルモノハベ崇厚ヲ處刑シタルカ如キ是ナリテ又或カニシテ力未嘗く用ひ候事國家ハ國家ノ一私人物又外國人又外國國家ニ對シテ危害ヲ加ヘタルニ對シテ責ヲ負ハサルヘカラス其責任ハ監督カ不十分ナリシモキニハミ負ブヘキモノニシテ反證アルトキハ責ヲ負フヘキモノニ非ス彼ハ生麥事件ノ如キ又獨逸ノ宣教師ヲ支那人カ殺シタルカ如ギハ一例ナリ然レ同モ茲ニ一ノ原則同モ云フヘキモノハ外國人ハ内國人ノ受タル保護ヨリ多クノ保護ヲ請求スルコトヲ得ストノコト是ナリハ不當ノ類似ニ甚シキ事例也國家ノ實體財産ニ被る過誤責任免除ノ方法ハ之ヲ學理的ニ説明スルコト能ハサルヲ以テ方法ノ種類ノミ

ヲ列舉ス
一 謝罪
二 謝罪ノ方法ハ如何ル方法ニテモ可ナリ而シテ謝罪スルハ必ス

三 將來ノ安全ノ保證
四 償金
五 土地ノ割譲

六 違人ノ處罰
等是ニシテ以上ノ方法ハ必スモ探ラサルヘカラサルモノニ非シテ數多ヲ併セテ主張スルコトヲ得ルナラ議モ措置スルモシテ聯合國ヘベ北米合衆國ニ市

一 聯合國ニ市
第六章 國家ノ權利義務繼承

國家ノ全部又ハ一部カ或他ノ國家ニ讓渡カセタル場合ニ於テ讓受國ハ被渡國

ノ有シタル權利義務ヲ如何ナル程度マテ繼承スルヤ此問題ハ之ヲ國家全部讓渡ノ場合ト一部讓渡ノ場合トノ二箇ニ區別スルコトヲ得ヘシ

(一) 國家ノ全部ヲ讓渡シタル場合 此場合ヲ別ナテ更ニ左ノ三ト爲ス

(A) 或一國家カ或他ノ國家ノ全部ヲ併呑シタル場合 例へハ北米合衆國カ布哇ヲ併合シタルカ如キ是ナリ
(B) 故國家相集リテ他ノ一國家ヲ掠奪シタル場合 例へハ千七百九十二年埃及

露普三國カ波蘭ヲ掠奪シタルカ如キ是ナリ

(C) 多クノ國家カ滅亡シテ一國ノ成立シタル場合 例へハ伊太利中ノ諸國カ滅亡シテ一ノ伊太利王國ノ成立シタルカ如キハ之カ實例ナリ

(二) 國家ノ一部ヲ讓渡サレタル場合 此場合ハ更ニ二ニ區別スルコトヲ得ヘシ

(A) 國家ノ一部分ノ土地ノ割譲ノ場合 例へハ日本カ臺灣ヲ讓受ケ千八百九十一年北米合衆國カ西班牙ノ領土ヒリビン群島ヲ讓受ケタルカ如キ獨逸カ佛蘭西領土ノ一部アルサスローレンノ土地ヲ讓受ケタルカ如キ是ナリ

受ケ若クハ其保證ヲモ爲スベカラス然レトモ中立國人民カ交戰國雙方ト商業ヲ營ムハ自由ナガカ故ニ金錢ハ勿論兵器彈藥ヲモ其商業上交戰國ニ給與スルハ妨ナク單ニ交戰國ハ戰時禁制品トシテ其運搬中捕獲シ得ヘキニ遇キス殊ニ金錢ハ商業ニ缺クヘカラナルニ由リ交戰國トノ商業ヲ全ク禁止スルニ非サレハ其流入、流出ヲ防ダ能ハス又中立國人民カ交戰國ノ公債募集ニ應スルモ自由ニシテ政府ニ於テ総合之ヲ禁シントスルモ一タヒ其債券ノ市場ニ現ハルトキハ其賣買ヲ監督スル能ハサルモノナルヲ以テナリ
中立國政府ハ其版圖内ノ人民カ交戰國ヨリ海上捕獲ノ免狀ヲ受ケア戰爭行爲ニ從事スルヲ禁スヘキノ義務ヲ有ス然レトモ國家ハ版圖内ニ在ル箇人ノ動作ニ付キ維令嚴密ノ監督ヲ爲スモ其箇人カ領内ヨリ出發シテ交戰國ニ至リ戰爭ニ拿捕ノ用ニ供スルニトヲ自今廢止ストノ規定アルニ依リ明カナリ加之中立國ハ其人民カ版圖内ニ於テ交戰國ノ海陸軍ニ入り又ハ之ニ加ハルノ目的ヲ以テ出發スルヲ防止スヘキ義務ヲ有ス然レトモ國家ハ版圖内ニ在ル箇人ノ動作ニ付キ維令嚴密ノ監督ヲ爲スモ其箇人カ領内ヨリ出發シテ交戰國ニ至リ戰爭ニ拿捕ノ用ニ供スルニトヲ自今廢止ストノ規定アルニ依リ明カナリ加之中立國ハ其人民カ版圖内ニ於テ交戰國ノ海陸軍ニ入り又ハ之ニ加ハルノ目的ヲ以テ

ニ反シテ其版圖内多數ノ自國人民カ團體ヲ成シテ交戰國ニ向ヒ戰争ニ加ヘラントスル者ハ容易ニ知得シ得ヘタ又禁制シ得ヘキニ由リ其出發ヲ禁復ル義務アルモソトス。然モ中立國内ノ軍隊等は遂に内戦を起す人、被虐者ニ其人矣。第二款 中立國版圖内ノ戰爭行爲以用ニ供セシ恩幸財物の用意其上を自メサルノ義務。或て之ニ隨じて開港せり既ニ中立國ナラス中立國甚亦交戰國ニ對シ其不可侵ヲ維持スヘキ義務ヲ有ス隨テ其版圖内ニ於テ交戰者間ノ戰争行爲ヲ一切禁スヘタ交戰國一方ノ軍隊カ追撃セラレ自國內ニ入りタルトキニ之ヲ追拂フノ義務ナキト同時ニ其地ニ於テ戰争ヲ為ナシメス又戰爭終局マテ其軍隊ヲ收容スルノ義務アリ又領海若クハ港内ニ於テ交戰國一方カ軍艦カ他國軍艦ヲ攻撃シ或ハ商船ヲ捕獲シタルトキハ中立國ハ之ヲ防止シ其防止ノ爲メ兵力ヲ用フルモ妨ナシ而シテ若シ此義務ヲ怠ルトキハ被害國タル交戰國ニ對シ救濟賠償ヲ責ム任シ加害國ハ中立國ニ對シ其領土權ノ侵犯ニ付キ責任ヲ有ス然レト著若シ其戰争行爲ノ被害者ニシテ自ラ戰

爭ヲ開始シ中立國主權ノ侵害ヲ爲シタルトキハ中立國ハ其結果ニ付キ毫モ責任アルコトナシ。同一賊寇が其謀略ミ試みヘ水兵を擧て暴國ノ暴挙を中立國版圖内ヲ交戰國軍隊ヲ通シテシムベカラヌアルハ疑カシト雖モ第十九世紀以前ニ於テハ一般ニ其通過ヲ交戰國ノ權利トシ兵士ノ募集セ妨ナキモノト看做サレ近世ニ於テモ「フリモード」ノ如キハ中立國ガ同一ノ許可ヲ交戰國双方ニ與フルトキハ中立タルニ妨ナシト論セリ然レトモ中立國領土内ニケル兵士ノ募集又ハ軍隊ノ通過ハ其許可三依リテノミ之ヲ行ヒ得ベタ且中立國ニ於テ其許可ヲ爲スニ付キ戰争ヲ進行上同一事情スニ交戰國双方ノ軍隊ヲ通過セシムル能ハス其許可ノ前後ニ關シテハ戰争ノ勝敗ニ關係アルノミナラス軍隊ヲ通過セシムルカ又ハ兵士ヲ募集スルノ行爲自體ニ於テ其性質上戰爭ノ進行ヲ援助スルモノナルカ故ニ局外中立ノ原則ニ反スルモノトス然レトモ軍隊ノ病者、傷者ヲシテ中立國ヲ通過セシムベハ千八百七十四年「ブルネル」宣言及ヒ平和會議ニ於ケル陸戰ノ法規、慣例ニ關スル條約第五十九條ニ之ヲ規定シ「中立國ハ交戰軍ニ屬スル傷者及病者ノ其版圖内ヲ通過スルヲ許ス」と

得ベシ但シ之ヲ輸送スル列車は、戦闘ノ人員及材料ヲ搭載セラルヲ條件トス
ベシ斯ノ如き場合ニ於テハ中立國ハ之カ爲必要ナル保安及監督ノ處置ヲ施ス
ヘキモノトス前記ノ條件ニ依リテ甲交戰國カ乙交戰國ニ屬スル傷者及病者ヲ
中立國內ノ版圖内ニ伴レ來バトキハ中立國ハ之ヲ監守シテ再ヒ作戰動作ニ與
ルコト能ハサラシムヘシ甲交戰國ヨリ依頼ヲ受ケタル傷者及病者三對シテモ
亦同一ノ義務ヲ有スヘシトセリ_{出島太閤又スル源翁ノ報刊ニ關スル文}
戰爭行爲ノ準備地即チ戰爭ノ根據地及ヒ遠征ノ出發地ト爲スヘカラヅルハ亦
中立國ノ義務ニ屬シ其版圖内ニ於テ交戰國軍艦及ヒ軍用ノ船舶ヲ製造若クハ
武裝シ又ハ其戰闘力ヲ版圖内ニ於テ増加スルヲ禁スヘキ義務ヲ有シ水兵ノ募
集ヲモ禁スヘキニ由リ米國ハ千八百十八年ノ法律ヲ以テ版圖内ニ於ケル人民
ニシテ交戰國船舶ノ港内ニ在ル者ニ對シ戰闘力ヲ増加スル行動ヲ禁シ軍艦本
國ノ人民ヲ除キ其他ノ人民ハ其水兵ト爲ルヲ禁シ英國ハ千八百十九年及ヒ七
十年ノ法律ヲ以テ同一規定ヲ爲シ其規定ニ於テハ水兵ニ關スル米國ノ例外ヲ
削除シ明治三十一年我勅令第六十八號ニ於テモ内外人ヲ問ハズ帝國版圖内ニ

於テ交戰國海陸軍ノ募集ニ應シ若クハ其事務ニ從事シ又ハ軍用ニ供スル船舶、
捕獲私船ノ船員ト爲リ又ハ其募集ニ應スルヲ禁シ若クハスル艦船ニ兵器、彈薬
其他戰爭直接ノ用ニ供スル物品ノ供給及ヒ交戰國一方ノ戰爭又ハ捕獲ノ用ニ
供スル目的ヲ以テ艦船ノ賣買、貸與ヲ爲シ武裝若クハ艦裝ヲ爲シ又ハ其補助ヲ
爲スコトヲ禁セリ然レトモ諸國國法ニ於テ局外中立ヲ維持シ其義務ノ違反ヲ
防ク爲メ如何ニ嚴密ナル規定ヲ設クルニ其自由ニ屬スト雖ニ國際公法上中立
國ノ權利義務ハ其規定ト關係ナク其規定如何ニ依リ左右セラレナムコトヲ注
意セナルヘカラス由ヒ英國亦非主張學究ハ未だ問題未だ且英國猶御事無

第三款 中立國ノ義務不履行ヨリ生スル直接損害

學者中中立國カ其義務ヲ實行セガルヨリ交戰國二方ニ與ベタル結果ハ直チニ
對手國ノ權利ヲ侵害シ之ニ損害ヲ與ヘタルモノト謂フヘカラスト爲ス者アレ
トモ國際公法上國家ノ權利義務ニ關スル法則ニ違反スルベ其權利ノ侵害ニシ
テ之ニ伴フ損害ハ中立國ニ於テ賠償ノ責任ヲ有ス彼ノアラバマ事件ニ於テ英

國ハ一千五百五十萬弗ヲ米國ニ支拂ヒタルハ其一例たり同船ハ千八百六十二年英國リバーブル港「レセード」商會ニ於テ製造セラレ同年五月十五日進水式ヲ行ヒタリシカ南軍ノ軍艦ト爲スノ目的ニテ製造中ナルコトヲ同港在留ノ米國領事カ探知シテ倫敦駐在米國公使ニ報告シ公使ハ六月二十三日英國外務大臣ニ照會シテ其差押ヲ請求シ政府ハ直チニ税關委員ニ取調ヲ命シ七月一日税關委員ノ意見トシテ同船ハ戰爭用ノ爲メ製造セラレ居ルモノナレント兵器、彈藥ノ武裝ナキニ由リ英國法律上差押フルコト能ハストシ且米國領事ニ於テ「リバーブル」ノ税關長ニ對シ同船ヲ外國軍隊入籍條例ニ依リテ處置スルニ足ルヘキ證據ヲ提供スヘキコトヲ勸告シタルヲ以テ領事ハ更ニ證據ヲ蒐集シテ提出シ七月二十四日米國公使ハ再度ノ請求ヲ爲シタルヲ以テ政府ハ法律顧問ニ之ヲ諮詢リ同顧問ハ二十八日ニ於テ其出發ヲ差止ムヘキ報告ヲ爲シタリ然ルニ同日朝アラバマ號ハ試運轉ノ形ヲ裝ヒテ出帆シ「アンダレント州」ノ海岸モエルフランクニ至リ「リバーブル」港ヨリ別船ニテ送致シタル四十名ノ水夫ヲ乗込マシテアゾール島ノ「タルセイラ」港ニ至リ倫敦及ヒ「リバーブル」ヨリ廻漕ニ保

ル兵器、彈藥ヲ武裝シテ南北戰爭中北軍商船七十艘ヲ捕獲シ「ブタリダ」シエナンダス」「ジーリジャ」「オムター」等ノ船舶モ同シク英國ニ於テ製造シ兵器ハ別ニ商品トシテ英國版圖外ニ廻漕シ其船舶ヲ武裝シテ軍艦ト爲シタルモトス此事實ニ依リアラバニ其他ノ船舶ハ英國版圖内ヨリ軍艦トシテ出發シタルニ非ヌ領海外ミテ之ヲ綜合シテ軍艦ト爲シタルモノナルツ以テ船體ト兵器トヲ備備ノ注文ト看ルトキハ普通船舶ノ製造ト商品タル軍用品ノ賣買トニ過キシシテ中立國ハ其責任ヲ有スヘキモノニ非ス然レドモ領海外ニ於テ之ヲ綜合シタル所ニ付ケ云ヘ以故國ニ對スル武裝ノ遠征ト爲シモノトス依テ戰爭後米國政府ハ「アラバマ」號以下ノ船舶ヲ製造シ其出發ヲ英國ニ於テ禁セサリシ事實ヲ中立國ノ義務違反トシテ其損害ヲ請求シテ兩國ノ紛議ヲ惹起シ遂ニ此問題ハ千八百七十二年華盛頓條約ニテ仲裁裁判ニ付タルコトト爲リ裁判者ハ英米兩國ヨリ各二名伊國瑞西及ミ「ブランズ」國ヨリ各一名ヲ以テ成立スルコトキシ千八百七十二年九月ゼキバニ開廷シテ英國ノ敗訴ト爲レザ山々々無誠々雙書其裁決華盛頓條約第六條ニ於テ仲裁裁判者カ裁判ヲ爲スヘキ標準トシテ三法則互規

定シ中立國政府ノ義務ハ第一、其版圖内ニ於テ平和ノ關係アル國家ニ對シ巡洋又ハ戰爭ヲ實行スル目的ヲ有スト信スヘキ相當ノ理由アル船舶ノ製造、武裝若クハ艦裝ヲ防止スル爲メ相當ノ注意ヲ爲スヘタ又其巡洋若クハ戰爭ヲ爲ス目的ナル船舶ニシテ其船舶ノ全體若クハ一部カ其版圖内ニ於テ殊ニ戰爭ノ用ニ適シタルモノヲ其版圖内ヨリ出發スルヲ防止スヘキ相當ノ注意ヲ爲スヘキユト第二、其諸港又ハ水上ヲ交戰國一方ク他方ニ對スル海軍行動ノ根據地トシ又ハ軍事上ノ需用品若クハ兵器ノ改新又ハ増加或ハ兵士募集ノ目的ニ使用スルノ許可若クハ其使用ヲ爲サシメサルコト第三、其諸港及ヒ水上ニ關シ並ニ版圖内ニ於ケル總ナノ人民ニ關シテ前記ノ義務及ヒ責任ノ違反ヲ防止スヘキ相當ノ注意ヲ爲スヘキコト規定シ大陸學者ハ此三法則ヲ國際公法ノ原則ト看做シ英米ノ學者ハ之ヲ國際公法ニ非ストシ殊ニ英國政府ハ此三法則ニ關シ華盛頓條約中ニ於テアラバマ其他ノ事件ニ關シ米國ヨリ賠償ノ要求アリタル當時ニ於テ國際公法ノ原則トシテ之ヲ認ムル能ハスト雖モ兩國ノ交誼ヲ厚クシ且將來完全ノ法則ヲ設タル爲メ兩國間ノ本問題ヲ決スルニ當リ此規則ニ依ルコト

ヲ仲裁裁判者ハ了知スヘタ又將來兩國ハ此規則ニ準據シ且他ノ海上諸國ニ於テ之ニ同意スルコトヲ勸誘スヘキコトヲ約定ストノ明文ヲ記載シ少クモ英國ハ當時之ヲ國際公法ノ法則ト看做サス其後英米兩國ハ此規則ニ付キ他國ノ同意ヲ求ムル爲メ其照會ヲ爲シテ試ミタリシカ其文案ニ付キ意見ヲ異ニシ千八百七十四年以後ハ其照會ノ協議ヲモ廢止セリ之ニ先チ埃及兩國ハ此法則ヲ承諾セサルノ意見ヲ公ニシ如何ナル國家モ未タ其三法則ニ同意シタルモノナク且此法則ニ反對スル學者ハ之ヲ目シテ中立國ノ義務ヲ非常ニ増加シ實行スヘカラサルモノト看做セリ然レトモ右法則ヲ熟考スルトキハ第二法則ハ現行國際公法ノ原則タルコト既ニ中立國ノ義務ヲ説明シタル所ニ依リ明白ナルヘシ然ラハ中立國ノ義務ヲ增加スル點如何ト云ハハ第一法則ニ付キ今日中立國ノ義務トスル所ハ交戰國間ノ戰爭ヲ爲スノ目的ヲ有スル船舶ノ製造、艦裝、武裝ヲ防止スベキニ非ヌ單ニ其出發ヲ遠征トシテ禁スヘキニ遇キス然ルニ此法則ハ船舶使用ノ意思如何ス豫メ識別スルノ困難ナルニ拘カラス戰爭行為ヲ爲スノ目的ト信スルニ相當ノ理由アルモクノ製造、艦裝若クハ武裝ヲ防止スル注意

ヲ怠ルヲ中立義務違反トシ且戦争ノ使用ト爲リタル船舶カ一部カリトモ版圖内ニ於ク戰争ニ適シタル故ニ以テ出發ヲ禁スヘキ注意ヲ怠ルベカラスホシ又第三法則ニ於テ斯ル事實ヲ版圖内ニ於ケル人民カ港内又ハ領海内ニ於ク金ツルヲ防クノ注意ヲ中立國ノ義務トシタルニ在リトス加之」を于ハ「裁判ノ判決ハ其當否ニ付キ議論アリテ英國政府ハ果シテ相當ノ注意ヲ缺ケタルセ否を疑ナキ能ハス英國政治家ハ総合三法則ヲ是認スルモ之ト同時ニ其判決ヲ認ムヘカラスト公言セリ又華盛頓條約ノ三法則ニ於テ先フ決定スヘキ事ノ於中立國ノ義務トシタルヘギ相當ノ注意トハ如何ナル程度ノ注意ガリ半存問題無シテ此點ニ付テモ仲裁裁判ノ判決ヲ容易ミニ認スル能ハカルカ如ク英國ハ各場合ニ於テ國際上ノ義務トシタル注意ヲ意味シ其程度カ慣例又ハ條約ニ於テ肯定セラルトキハ其義務自體ノ性質並ニ斯法ノ基礎タル正義公平並ニ一般便宜ノ觀念ニ依リテ決區ヘキモノトセリ此英國ノ議論タル中立國ノ義務ハ國際公法上中立國ノ義務ト看做スヘキ也フニ依ルヘシト爲スニ外ナヌシテ循環論タル免レス又米國政府ノ見解ニテノ注意ノ程度ハ其義務ヲ盡ナカルヨリ生スル結果免レス

果ニ依リテ判定スヘキモノトシタルヲ以テ其程度ハ將來未必ノ結果ニ依ル莫キモノトシタルノ論ナルカ故ニ實行シ能ハサルモノト謂フヘタ更ニ又ゼチゴ仲裁裁判者ハ相當ノ注意トハ中立國ノ義務ヲ履行セサルヨリシテ生スルコトアルヘキ危險ニ比例シテ之ヲ決スヘキモノナリトセリ此說タル論理アルカ如クニシテ實際中立國ノ義務ヲ益不明瞭下爲シタルモメトス何トナレハ同一戰爭中ニ於テモ中立國ノ位置若タバ戰争進行ノ事情ニ依リ交戰國ニ處スコトアルヘキ危險ノ程度ハ時時刻刻變更シテ之ヲ一定シ得ヘカラツルヘキヲ以テナリ

檢所ニ引致シ其法廷ハ國際公法ノ法則ニ依リ之ヲ審判處罰シ人民ノ本國タル
中立國ハ之ニ對シテ故障ヲ唱フ能ハス但本章ニ論スル法則ハ海上捕獲ニ關
スルモノニ限リ陸上ニ於テ中立國人民及ヒ其財產カ戰地又ハ占領地ニ在ル場
合又ハ其人民カ戰爭行爲ニ關與シ若クハ之ヲ妨害スルトキハ交戰國ハ之ヲ敵
國人民ト同一ニ待遇シ其人民ノ居所ニ於テ主權ヲ行使スル國家カ其監督ヲ爲
スカ故ニ茲ニ論スルノ必要ナシ又海上ニ於テモ中立國版圖内ハ不可侵ナルカ
故ニ其領海内ニ於テハ交戰國人民タルト自國若クハ他ノ中立國人民ナルトヲ
問ハス交戰國軍艦ハ拿捕ヲ行フヘカラサルハ勿論臨檢ヲ爲ス能ハス是故ニ本
章ニ論スル中立國人民ニ對スル權力實行ハ單ニ公海若クハ交戰國領海ニ於テ
中立國軍艦其他ノ官船ヲ除キ他ノ中立國ノ船舶即チ私有船舶ニ對スルモノニ
シテ公海ニ於テ他國商船ニ對シ軍艦カ權力ヲ及ホス能ハサル平時公法ノ例外
タルモノトス

中立國カ中立國領海以外ノ海上ニ於テ中立國箇人ノ船舶ニ權力ヲ及ホス場合
ハ四種ト爲シ得ヘシ第一、臨檢搜查第二、封鎖ノ侵犯第三、戰時禁制品ノ犯則第四、

中立巡視ノ業務ニシテ此等ニ關スル法則ノ侵犯ハ交戰國自ラ處罰シ中立國
毫モ責任ヲ有スルコトナシ何トナレハ中立國ハ其版圖外ニ於タル箇人ノ行爲
ヲ監督スヘキ直接ノ義務ナク又其行爲ニ付キ責任ヲ有スルモノニ非ス換言ス
レハ中立國人民カ他國版圖内ニ於テ交戰者ノ權利ヲ侵害スル者キハ其領土國
ハ之ヲ警防、鎮壓シ其行爲ニ關シテ交戰國ニ責任ヲ有スヘタ若シ又公海ニ於テ
斯ル行爲ヲ爲ス者アルトキハ如何ナル國家モ其海上ヲ管轄スル能ハス其場所
ニ於ケル行爲ニ付キ責任ヲ負ハサルカ故ニ交戰國自ラ之ヲ警防、鎮壓シテ直接
ニ其違犯者ヲ罰スルノ外オキヲ以タカリ加之中立國ハ其人民カ戰時禁制品ノ
運搬ニ從事シ若クハ封鎖ヲ破ラントスルノ行爲等ヲ國際公法上ノ犯罪ト看做
ナシシテ自國法廷ニ於テハ斯ル行爲ヲ目的トスル契約其他ノ法律行爲ヲ不法
トセス隨テ國際公法上中立國人民ハ斯ル行爲ヲ爲スノ自由ヲ有スルト同時ニ
交戰國ハ戰爭ニ關スル權利ノ侵害トシテ之ヲ罰スルノ權利アルニ過キス而シ
テ其權利ハ國際公法ノ法則トシテ一般ニ承認セラレ中立國ハ交戰國カ其法則
ノ實行上不法ナルコトアル場合ニ於テノミ外交機關ヲ經由シテ之ニ抗議シ其

救濟賠償ヲ求メ得ヘキニ止ムトス。長崎開港、鴨山々々ニ異議モ其
其勢國々交渉ノ間、其事項、其處所、其時日、其事由、其原因、
海上捕獲トハ交戦國カ海上ニ於テ敵國財產ヲ攻撃シ之ヲ拿捕シテ没収シ又中
立國人民ノ船舶ニシテ戰爭行為ノ妨害ヲ爲スモノヲ拿捕沒收スルノ行爲ニシ
テ敵國財產ニ關スル海上捕獲ハ交戦國間ニ關スル法則ニ關シテ説明スヘキモ
ノナルカ故ニ予ク中立國ノ財產ニ關スル海上捕獲ノミヲ茲ニ説明スヘシ古來
中立國人民ニ關係アル海上捕獲ノ法則ハ三變遷アリタルモノトス即チ中世以
來、コンソラト、デルマトル法典ニ於テハ交戦國ハ總テ海上ニ於ケル財產ヲ其
所有者ノ敵人ト否トニ依リ捕獲ト否トヲ區別シ敵國ニ屬スル搭載品ハ聯合中
立國船舶内ニ在ルモ之ヲ沒收シ同船ヲシテ其物品ヲ自國ノ安全ナル場所ニ運
搬セシメ船長ハ物品所有者ノ契約ニ基ク運貨ヲ取得ス之ニ反シテ中立國船
舶ハ普通ノ商業即チ其船舶ノ使用ハ封鎖ヲ破ラントスルヨトナク又ハ中立國

違犯ノ業務ニ從事セス又搭載品ハ戰時禁制品ニ非ナルトキハ捕獲セラルル固
トナク更ニ中立國ノ商品ハ敵國船舶内ニ在ルトキモ捕獲セラルルヨトナクシ
テ其所有者ハ同船舶ノ拿捕ニ際シ船舶ヲ賠償シテ航海ヲ繼續シ得ヘタ若シ其
賠償ヲ爲ササルトキハ捕獲者ハ之ヲ本國ニ送致シテ船舶ヲ取得シ物品所有者
ハ船舶所有者ニ拂フヘキ運賃ヲ捕獲者ニ支拂フヘタ若シ商品所有者カ船舶賠
償ニ付キ捕獲者ノ満足スヘキ條件ヲ提出キルニ拘ヘラス捕獲者カ之ニ應セオ
ルトキハ其損害ノ賠償ヲ求メ又運賃支拂ノ義務ナシトセリ此法則ハ第十六世
紀以後歐洲一般ニ行ヘレ諸國ハ拿捕ニ係ル船舶及ヒ搭載品ヲ審判スル爲ゾ捕
獲審檢所ヲ設クルノ義務ヲ負ヒタルモノトス。長崎開港、鴨山々々ニ異議モ其
此法則ニ對シ第十七世紀中ニ於テ中立國ノ商業ノ妨害ヲ減スル爲メ捕獲ト否
トヲ船舶如何ニ依リヲ決スベノ法則即チ自由船自由物敵船敵物ノ主義ヲ生セ
リ此主義ハ和蘭國ノ主唱ニ出テ千六十五一年乃至千八百年ニ於テ諸國ハ其
便宜ヲ認メ條約ヲ以テ此法則ヲ約定シタルモノ歟カラス此主義ト舊法則トヲ
比較シ最モ嚴ナル點ヲ集合セハ敵船内ニ中立國財產並ニ中立國船内ノ敵物ヲ

沒收スルコトト爲リスル行爲ハ第十六世紀及ヒ第十七世紀ニ於テ往々行ハレ
甚シキハ佛國ニ於テ行ヒタル如ク敵物ヲ搭載スル中立國船舶ハ其搭載ノ爲メ
船舶モ敵船ニ感染ストノ故ナ以テ船舶ヲモ沒收セリ之ニ反シテ兩法則中寛大
ナル點ヲ集合セハ敵船内ノ中立國物品ヲ自由トシ中立國船内ノ敵物ヲ自由ト
スヘキノ結果ト爲リ千七百五十二年シレシキ事件ニ於テ普國ハ之ヲ主張シ千
七百八十年及ヒ千八百年ノ武裝中立ニ於テ「バルチック沿海諸國ハ宣言中ニ同
一法則ヲ言明シタレトモ是レ固ヨリ當時ノ國際公法ニ非ナリシカ千八百五十
四年クリミヤ戰爭ニ於テ英佛兩國ハ此主義ヲ採用シ次テ千八百五十六年四月
巴里宣言ヲ歐洲七大國間ニ締結シ其第二條ニ局外中立國ノ旗章ヲ掲タル船舶
ニ搭載スル敵國ノ貨物ハ戰時禁制品ヲ除クノ外之ヲ拿獲スヘカラツルコト又
第三條ニ敵國ノ旗章ヲ掲タル船舶ニ搭載ノ局外中立國ノ貨物ハ戰時禁制品ヲ
除クノ外ハ之ヲ拿獲スヘカラツルコトシ米國西班牙黑西哥「グエシラ」ヲ除
クノ外ハ諸國一般ニ之ニ加盟スルニ至レリ就中米國ノ此宣言ニ加盟セナルハ
同宣言第一條ニ於テ私船ヲ拿捕ヘ用ニ供スヘカラストシタルコトニ反對シ同

報

○住職任免當否ノ豫断 司法裁判所カ私權關係ニ付キ裁判ヲ下サントスル
ニ際シ先づ權限外ニ屬スル事項ヲ判斷スルニ非ナレハ其裁判ヲ與フルコト能
ハスト認メタルトキハ其權限外ノ事項ニ付テモ判斷ヲ下スコトヲ得ルヤ否ヤ
ハ議論ノ餘地ナシトセス此點ニ關スル大審院ハ其聯合部ニ於テ断定ヲ與ヘテ
曰ク「寺院ノ住職任免ハ固ヨリ民法上ノ行爲ニ出フルモノニ非ナルガ故ニ之ヲ
民事上ノ訴ノ目的ト爲シタル場合ニ於テ其當否ヲ判斷スルコトハ司法裁判所
ノ職權ニ屬セスト雖モ主タル私權上ノ争ニ住職任免ノ當否ノ如キ争ノ加ハル
トキ司法裁判所ニ於テ此争ヲ豫断スルコトヲ得ナルモノトセハ原告ハ其請求
ニ付キ常ニ司法裁判所ノ裁判ヲ受クルコトヲ得ケルカ如キ奇怪ナル結果ヲ生
スルニ至リ私權ノ侵害ヲ受ケタル場合ニ之カ救濟ヲ受クル爲スニ設ケラレタ
ル司法裁判所ノ存シカズ私權上ノ争ニ付キ其裁判ヲ受クルコトヲ
得ナルノ結果ヲ生ス可タシオ此ノ如キハ司法裁判所ヲ設ケタル精神ニ背戾セ

リ又司法裁判所ハ私権上ノ争議ヲ裁判ス可キ職責アル點ヨリ論スルモ主タル
私権上ノ争テ判断スルニ當リ往職任免ノ當否ノ如キ争テ裁断スルコトヲ得ル
モノト云ハサル可カラス然ラナルニ於テハ司法裁判所ハ其職責ヲ盡シ得可カ
ラサレバナリト(大審院明治三十五年三月三十八十九日民事訴訟合議庭判決引出書)
○外交官及ヒ領事官試験ハ同試験ハ來ル九月二十二日ヨリ施行セラルベキ
ニ付キ志願者ハ明治二十七年六月外務省令第七號ニ依リ九月十一日マニア出
願書ニ履歷書及ヒ論文並ニ之ヲ外國文ニ翻譯シタルモノヲ添ヘ外交官及ヒ領
事官試験委員長珍田捨巳氏ニ宛テ外務省ニ差出スヲ要ス其論文題左ハ如シ
仲裁裁判ヲ論ス(紙美濃十十五枚行三十字)英國公議會體育會規則
尚ホ前項翻譯ニ用フヘキ外國文ハ英文佛文又ハ獨文ニ限ルモノトス
○判事檢事登用第一回試験ハ同試験ハ來ル九月四日ヨリ執行セラルヘギ付
キ明治二十四年五月司法省令第三號判事檢事登用試験規則(明治二十六年司法
十九年同省令第五十二號同三十六號改正アリ)第五號ニ該當スル志願者ハ同則第八條ニ依
リ願書ニ履歷書及ヒ身分年齢兵役ニ關スル證明書並ニ同則第五條ニ定メタル

要件ノ證明書ヲ添ヘ司法省ニ差出スコトヲ要ス又現ニ官廳ニ奉職スル者ハ其
願書ニ所屬長官ノ認可書ヲモ添フルコトヲ要ス但願書受理期間ハ八月二十日
限トス其筆記試験日割ハ左ノ如シ

筆記試験日割

九月四日	午前	憲法	同	六日	午前	商法	同	九日	午前	國際公法
同	午後	行政法	同	同	午前	刑法	同	同	午後	國際私法
五日	午前	民事訴訟法	同	八日	午前	刑訴法	同	同	午後	國際私法
尚ホ右試験委員長並ニ委員ハ左ノ如シ										
委員長	判事	寺島直		判事	浦原武熊					
委員判事	法學博士	井上正一		判事	小山温					
判事	志方鑑			判事	棚橋愛七					
判事	掛下重次郎			判事	達藤忠次					
判事	鶴見守義			判事	齋藤十一郎					
○辯護士試験										
同試験志願書ハ明治二十六年五月司法省令第九號辯護士試										
驗規則(明治二十九年司法省令第ニテ改正アリ)依リ其願書ヲ試験委員長ニ宛テ控訴院檢事										
局ニ差出スコトヲ要ス其願書受理期間ハ九月十二日限トス尚ホ其筆記試験日										

割ハ左ノ如シ

筆記試験日割

九月二十二日(午前)

民事法

同

二十三日(午後)

民事訴訟法

同

二十六日(午後)

國際私法

同

二十七日(午前)

國際公法

同

試験委員長、委員ハ前項判事検事第一回登用試験ノ分ニ同シ

○文官高等試験臨時委員 同委員ハ左ノ諸氏仰付ケラレタリ

農商務省商工局長

東京帝國大學法科大學教授 法學博士

同

木内重四郎

東京帝國大學法科大學教授 法學博士

同

檢事 古賀廉造

東京帝國大學法科大學教授 法學博士

同

水内重四郎

東京帝國大學法科大學教授 法學博士

同

金井延

東京帝國大學法科大學教授 法學博士

同

内務省參事官

東京帝國大學法科大學教授 法學博士

同

○學年試験官 本校當學期學年試験ハ三學年共ニ本月二十三日ヨリ開始シ

○學年三學年ハ七月四日ニ了リ一學年ハ同五日ニ了ルコトト爲レリ

同

法學志林

第三十二號

六月十五日發行

毎月一回十五日發行 ○定價一冊金十錢郵稅一錢
 校友、生徒、校外生ニ限り特價一冊金八錢郵稅一錢
 十冊前金七十錢郵稅十錢

- 最近判決例批評二三
- 抵當權ノ訴ニ批評ヲ
- 監視期間ノ起算點ヲ論ス
- 南清兩洋遊歷談
- 社會主義ノ三大流派稿
- 慣習法ヲ論ス
- 發見シタル場合ノ有權ノ關係
- 物ノ二トーンノ法規ケラ他ノ土地ヲ
- 使用スル權利ノ性質
- 再審ノ訴ニ於ケル訴訟物ノ價額ノ算定
- 大審院最新判決例三十五件

發行所

(電話番町一七四) 東京市麹町區富士見町六丁目

司法省指定

和佛法律學校

校外生規則摘要

明治三十五年六月十九日印刷

(定價金貳拾錢)

一年ノ三部トス

講義錄ノ掲載科目左ノ如シ

第一學年 法律、倫理、憲法、民法第一編及ロ第二編第六掌
マテノ利法（商法）國際公法、經濟學

第二學年 民法第三編、商法第一編、第二編、第三編、刑
法（含國、民事訴訟法第一編第二編）、刑事訴訟法、行政
第三學年 民法（含國等七章以下第四編第五編）、商法
(第四編、第五編)、民事訴訟法（第三編以下）、商業法、行政
法、國際私法

講義錄ハ毎月六回左ノ期日ニ發行ス

第一學年 五日 二十日 第二學年 十日 廿五日

第三學年 十五日 三十日（但二月三日リ木日）

一 校外生ハ何時ニテモ入學スルコトヲ得

一 月謝金左ノ如シ

第一學年 全三十錢

第二學年 金四十錢

第三學年 金五十錢

全學年 金一圓

一 月謝ハ郵便爲替、銀行小切手、通運早達便ヲ
以テ東京市麹町區富士見町六丁目十六番地
和佛法律學校會計局宛ニテ送付スヘシ

東京市牛込區東横町十七番地
東京市牛込區矢来町三番地
松田久次郎
發行者

東京市牛込區東横町十七番地

松田久次郎

東京市牛込區矢来町三番地

松田久次郎

東京市牛込區東横町十七番地

松田久次郎

東京市牛込區矢来町三番地

松田久次郎

東京市牛込區矢来町三番地

松田久次郎

印 刷 者

小宮山信好

印 刷 所

金子活版所

發 行 所

司法省

和佛法律學校

(電話番號百七十四番)

明治二十二年十二月九日内務省許可

明治三十四年十一月四日第三種郵便物認可